

## 国体論の形成Ⅰ―南北朝正閏論争からみた南朝正統観の歴史認識

波 田 永 実

### はじめに

南北朝期の両朝並立と半世紀を超える内乱の評価については、いわゆる南北朝正閏論争として、一九一〇（明治四三）年小学校の国定教書とその教師用教科書の記述をめぐって政治問題化した。そもそも、正閏論とは、正は正統の意味で、閏とは本来あるものの他にがあるものをいい、あるものを正統と認めると、他のものは偽物ではないが正統ではないということの意味する概念である。これは、中国には複数の政権（王朝）が並存する場合がままあり、その何れが正統であるかが問題となった場合の議論として展開されてきた歴史がある。例えば、三国時代の魏・呉・蜀は何れが正統かという問題である。これは後に『大日本史』を検討するとき詳しく述べる機会があるとおもわれるが、中国では宋代に『資治通鑑』を著した司馬光は結果的に魏を正統とし、朱子はこれを批判し『通鑑綱目』において蜀を正統としたことがよく知られている。そこには中国独特の

史実と論理がそれぞれ反映しているのだが、日本の南北朝時代も二人の天皇・二つの朝廷が並存し、それぞれに貴族や武士たちが属して、武力による統一を目指して内乱を繰り返していた。その何れが正統な王朝であったか、というのが一九一〇年に表面化した南北朝正閏論争である。南朝を正統とすると、北朝は閏統（非正統な王権）ということの意味する。逆もまた論理的にも史実の上からも充分成り立ち得る根拠があった。

問題の発端は周知のごとく、大逆事件で逮捕起訴された幸徳秋水の秘密裁判での「今の天子は、南朝の天子を暗殺して三種の神器をうばいといった北朝の天子の子孫ではないか」という趣旨の発言が外部に漏れて、特に右翼・国家主義者を刺激したことが事件の背景にあった。非公開の秘密裁判での発言が外部に漏れた経緯は明確にされてはいない。しかし、かなり早い時期に漏洩が起こっていたことは間違いない。このことは、一九一一（明治四四）年一月一九日付けの読売新聞社説に「もし両朝の対立をしも許さば、国家の既に分裂したること、灼然火を賭るよりも明かに、天下の失態之より大なる莫かるべし。何ぞ文部省側の主張の如く一時の変態として之を看過するを得んや」あるいは、「日本帝国に於て真に人格の判定を為すの標準は知識徳行の優劣より先づ国民的情操、即ち大義名分の明否如何に在り。今日の多く個人主義の日に発達し、ニヒリストさへ輩出する時代に於ては特に緊要重大にして欠くべからず」と述べられているし、最後に検討する犬養毅の議會での桂内閣問責決議案の提案理由でも正閏問題と大逆事件との関係が指摘されていることから明らかである。<sup>(1)</sup>

この問題は、時の帝国議會で第二次桂内閣への政治的攻撃の材料として使われ、重大な政治問題となった。その過程については紙幅の関係上割愛するが、最終的には明治天皇の「南朝正統」という判断で政治決着した。もちろん、その背景には桂内閣の政治判断があった。その結果、教科書を執筆した喜田貞吉が休職になり、天皇制に関する客観的で自由な学問研究や言論が困難になっていく大きな契機となった。

ここで重要な論点は、南北朝何れが正統かという問題は南北朝期にあつてはそれぞれにとって自らのレーゾンデールに関わる重大問題であつたが、近代にあつては極めてイデオロギシユな性格を持っていた。つまり、南北両朝が半世紀以上にわたつて並立し抗争を繰り返していたという歴史的事象を、事実に即して客観的に記述することが困難になり、南朝が正統であり楠木正成や新田義貞ら南朝側で戦つた者たちは正統な君主に忠誠を尽くした「忠臣」であり、反対に足利尊氏ら北朝側は正統な君主に叛逆した「叛臣」であり、北朝六代の天皇は正統な天皇ではないという価値判断を天皇とその政府がおこない、その基準で義務教育をおこなうということを意味した。

この点に関して、南北朝史の代表的研究者の一人、村田正志は次のように述べている。<sup>(2)</sup>

南朝正統論は史論でありながら必ずしも史実に立脚しようとはせずに、思想問題として取り扱われる傾向が強い。思想としての南朝正統論は、調査や研究の結果ではなく、はじめから既成概念として決定しているのであり、これを辯證的に、または感情的に世に訴え説くことによって、新しい社会の出現を期しているのである。これは論者が意識するとしなやかかわらず、その心底に必ず存在することは疑いない。すなわち現実止揚の社会運動とみななければならない。

この評価は、南北朝期の北畠親房の『神皇正統記』以来、水戸の『大日本史』をその代表として南朝正統史観で書かれた史書の特徴をよく言い表している。つまり、久米邦武の筆禍事件、中島千久平の足利尊氏論問題、岡田啓介内閣時の「国体明徴」問題、美濃部達吉の「天皇機関説」事件、津田左右吉事件などとして展開された天皇制をめぐるイデオロギー的な諸問題の本質を鋭く突いた蓋し名言である。特に一九三〇年代以降「猛

威」を振るいアジア太平洋戦争敗北まで日本国民を「呪縛」した「国体論」・「皇国史観」の形成に南北朝正閏論争は大きな役割を果たしたと考えられる。しかも、この南朝正統の政治判断は戦後の現在もなお維持されていることは、考えようによつては奇妙なことである。われわれが学校教育で学習する南北朝期の天皇は後醍醐―後村上―長慶―後龜山と南朝をたどつて歴代が数えられ現在にいたっている。「皇国史観」は戦後否定されたにもかかわらずこのイデオロギー的な歴代の数え方が現在なお維持されているのは何故であろうか。

政治問題化した南北朝正閏論に関しては、南北何れが正統であるか、というよりは、「なぜ南朝を正統とはつきり教えないのか」、ということが焦点であったが、問題とされた小学校の国定教科書・教師用教科書の記述は、両朝並立論であった。つまり、詳しくは後述するように、これらは南北両朝どちらにも自己の皇統を正統と主張する根拠がそれぞれ存在することを前提に、どちらか一方を正統とし他方を閏統とすることは適当ではなく、両朝が共に並立していたと認めるべきであるという主張である。それは政治問題化した最後の段階で明治天皇の勅裁により南朝正統と政治決着する前までの、近代の実証史学研究の基本的立場であったといつてよい。この点に関しては、室町時代以来、孝明天皇までは北朝を正統とし歴代を数えてきた。それは血統上も歴史認識上も疑う余地の無い常識とされてきたところであった。<sup>(3)</sup>

正閏問題の政治的帰結として、南朝正統史観が「正しい」とされたわけであるから、以降、南北朝時代という時代区分は「吉野朝時代」と呼び換えられることになり、後醍醐天皇は日本を真の日本に復古させようとした偉大な天皇であり、明治維新の原型を示しながらも志半ばで倒れたた悲劇の天皇とされ、楠木正成ら南朝の「忠臣」たちは文字通り神格化され日本人の「在るべき姿」として顕彰されていった。<sup>(4)</sup> こうして歴史学の「政治神話化」が促進されていくことになる。正閏論争はその大きな契機となったのである。

## 第一章 南北朝以前の皇統分裂、皇統迭立、両帝並立の事例

### 一 古代の皇統並立の場合

本章では、南北朝正閏論争として立ち現れた論点を分析する前に、その前提として平安朝までの皇統の迭立の例と、両帝が並立していた例を考察し、次に南北朝の先駆けとなった後嵯峨天皇の死後、皇統分裂の原因となった持明院統と大覚寺統による迭立の過程をまず考察する。

歴代天皇の系譜をみると、結果的に「一系」にはなっているが、南北朝以前に皇統が分裂していた、あるいはそう思われる例はいくつか存在する。最初は継体天皇をどう評価するかという点にあるが、その問題を一応さておくと、その後皇統は、安閑―宣化―欽明と続くが、安閑―宣化朝と欽明朝が並立していたのでないか、との学説が存在する。この説を最初に唱えたのは正閏論争の一方の主役であった喜田貞吉であるが、<sup>(5)</sup>後に林家辰三郎が受け継ぎ発展させた。<sup>(6)</sup>三者とも継体の子であるが、安閑と宣化は同母の兄弟で、欽明は両者とは異腹

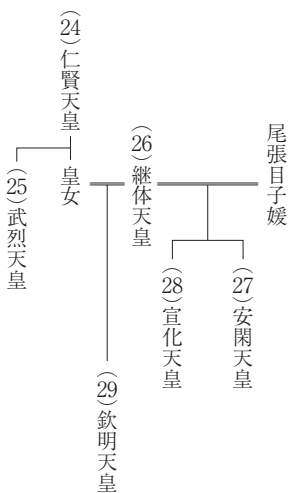


図 1

の弟である。両朝並立説の根拠は、本稿では深入りしないが『古事記』、『日本書紀』、『上宮聖徳法王帝説』、『百済本紀』などの史料の記述の矛盾をめぐる解釈からきている。しかし、これに否定的な学説も存在する。(図 1 参照)

また、壬申の乱の時は、『大日本史』のように大友の即位を認めれば、弘文天皇の近江朝と大海人の並立が問題となるが、大友の即位を認めたとしても大海人が即位

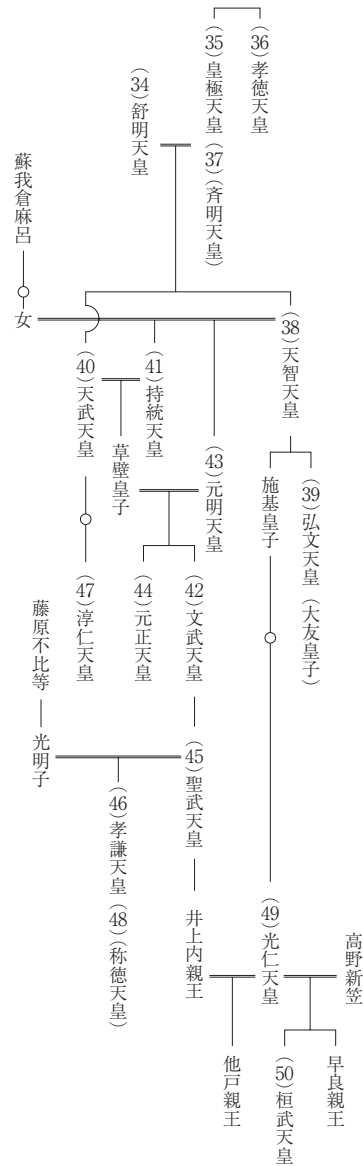


図 2

して天武天皇となるのは乱の収束後になるので、厳密に言えば両帝並立とはいえない。大友の即位を認めた場合は大海による皇位篡奪が問題となり、天武系の皇統が孝謙・称徳で絶えて、天智系の皇統が復活することを正統な皇統の復位として弁証することになる。『大日本史』の立場がこれに当たる。(図2参照)

平安時代に入り、京の嵯峨朝と奈良の平城上皇の場合「二所の朝廷」と呼ばれる分裂状態にあったことは事実であるが(一時的な二重政権状態)、天皇が同時に二人いたわけではない。さらに一年弱で薬子の乱は平定された。そしてその政治的結末として嵯峨の皇太子に立てられていた平城の子の高丘親王が廃されたことに政治的意義があった。嵯峨は自分の弟を立太子させ即位させた(淳和天皇)が、その皇太子には嵯峨の第一皇子が立てられた。それが仁明天皇である。その皇太子には淳和の皇子が立てられたが承和の変で廃され、仁明の第一皇子が立てられて文徳天皇となり、皇統は嵯峨―仁明―文徳の方に一元化された。後にも政治問題化す

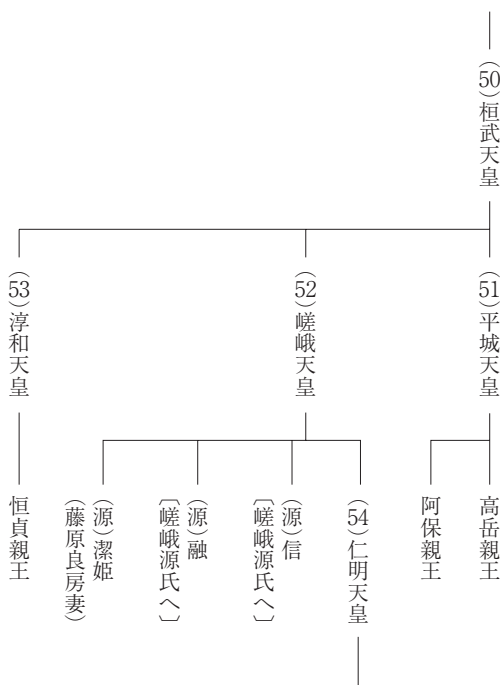


図 3

ることがあるのだが、この時代は兄弟相統も多く皇統分裂の原因となり得る条件は常に存在した。平城―嵯峨、嵯峨―淳和の場合は兄弟相統が皇統迭立になりかねない状況を生み出した。嵯峨―仁明の側には藤原良房がついており皇統を自らの子孫に伝え得たが、一方で藤原北家（就中後の摂関流）の台頭を招く結果にもなった。（図3・4参照）

その後、村上天皇の後、冷泉―円融と兄弟相統となるが、この場合も円融の皇太子には冷泉の第一皇子が立てられ花山天皇となる。そして花山の皇太子には円融の第一皇子が立てられ一条天皇となる。そしてその皇太子には冷泉の第二皇子が立てられ三条天皇となる。その皇太子には一条の第二皇子が立てられ後一条天皇となる。その後は後朱雀（後一条天皇の第三皇子）―後冷泉（後朱雀の第一皇子）―後三条（後朱雀の第二皇子）と続く。これをみても分かるように、皇統は冷泉系と円融系の迭立が後一条まで続き、その後は円融系に一元化され後三条に続く。この時代は藤原摂関家の全盛時代で、村上源氏など皇別氏族も巻き込みながら、さらに冷泉系の天皇

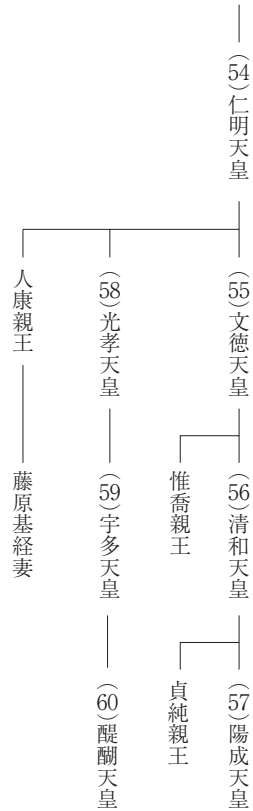


图 4

の病氣なども関係して天皇位の「争奪戦」が続いた。そして周知のごとく摂関家出身の母を持たない後三条の即位を契機に摂関家の全盛時代は終わりを告げて、後三条の第一皇子である白川天皇の即位となり院政期へと入っていく。冷泉と円融の場合も、兄弟相続から迭立になったわけだが、この場合は、藤原道長が冷泉・円融両系に娘を納れて皇子を誕生させ、関係の悪かった三条の皇子で後一条の皇太子であった敦明を廃して、後一条の第三皇子で自らの娘彰子所生の敦良を立太子させ即位させた（後朱雀）ことにより結果的に皇統が円融系に一元化されたことになる。（図5参照）

後三条から讓位され後に院政を開始した白川も順調に皇位を自分の子に伝え得たわけではない。後三条は白川の異母弟実仁を皇太弟に定め、さらにその弟輔仁も有力な皇位継承候補者であった。理由は両者とも母が藤原北家摂関流の出ではなかったことにあろう。藤原北家傍流とはいえ院院流出身の母を持つ白川の皇嗣に実仁、輔仁兄弟が当てられたのは、反摂関家を指向した後三条の強い意志であったと思われる。しかし、実際には実仁が早世したため（この時、後三条はすでに死去していた）、白川は輔仁ではなく実子を立太子させ即日讓位



したのである。(図6参照) もし後三条がこのときまで存命であれば、白河院政は史実のごとくには実現していなかったかも知れないのである。この後、詳しく見るように、父が死んだ後、異腹の兄弟あるいはその子への皇位継承という先帝の「遺詔」を無視して、実子を立太子させ譲位する例は亀山から後醍醐にかけて大覚寺統ではしばしば見られる傾向である。

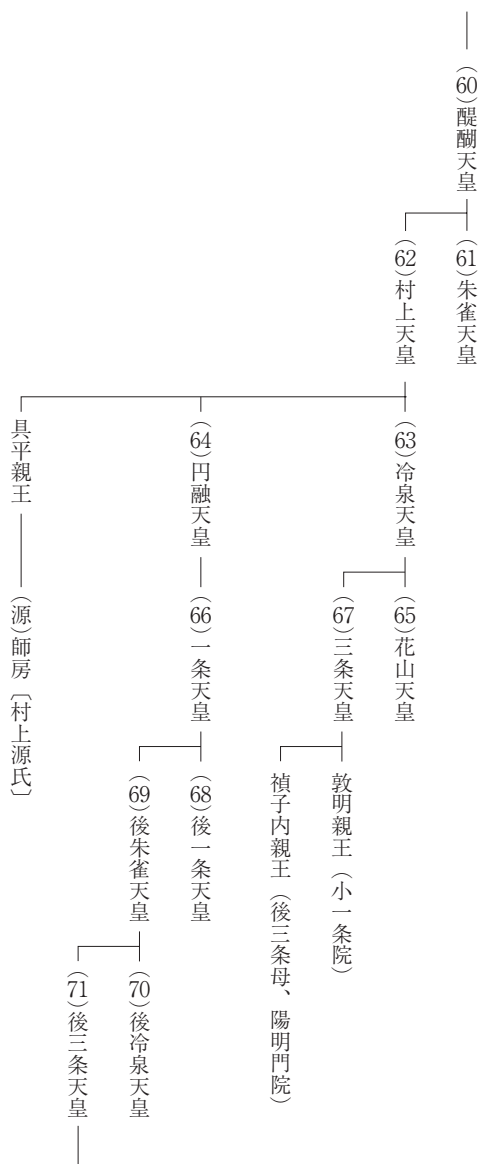


图 5

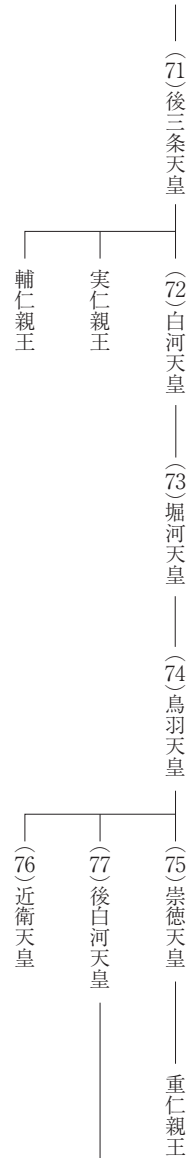


図 6

### 中世における両帝並立

また次代の鳥羽院政末期から後白河親政期にかけての保元の乱の原因も治天（天皇家の家長）の不在と、崇徳上皇と後白河天皇の兄弟の皇位継承にまつわる対立から、崇徳の実子重仁が皇位継承から外されたことが一因であったとされている。

後白河院政期にいわゆる源平の争いの過程で安徳天皇が三種の神器と共に西海に去り、後鳥羽天皇が神器なしで即位する。安徳の在位は一一八〇～一一八五年であり、後鳥羽の即位が一一八三年であるから約二年間は両帝が並立していたことになる（『大日本史』が主張するように神器のある方を正統とすれば、後鳥羽は正統ではないことになってしまう）。周知のように、後鳥羽は後白河の院宣で神器なしで即位した。そして壇ノ浦で平家が滅亡したとき、安徳天皇と共に神器は海に沈んだ。後に、剣は回収されなかった。神器については後述するが、それ以降は、伊勢神宮から後白河に献上された剣をその形代とした。

その後鳥羽は、第一皇子に譲位して土御門天皇とし院政を敷いた。次いで第三皇子に譲位させ順徳天皇とし院政を続けた。さらに、承久の乱の準備過程で、順徳の第一皇子に譲位させた。この幼帝は乱後鎌倉幕府によって廃位された。即位礼も大嘗祭も行われないまま廃位されたので、当時は歴代には数えられず、母の実家

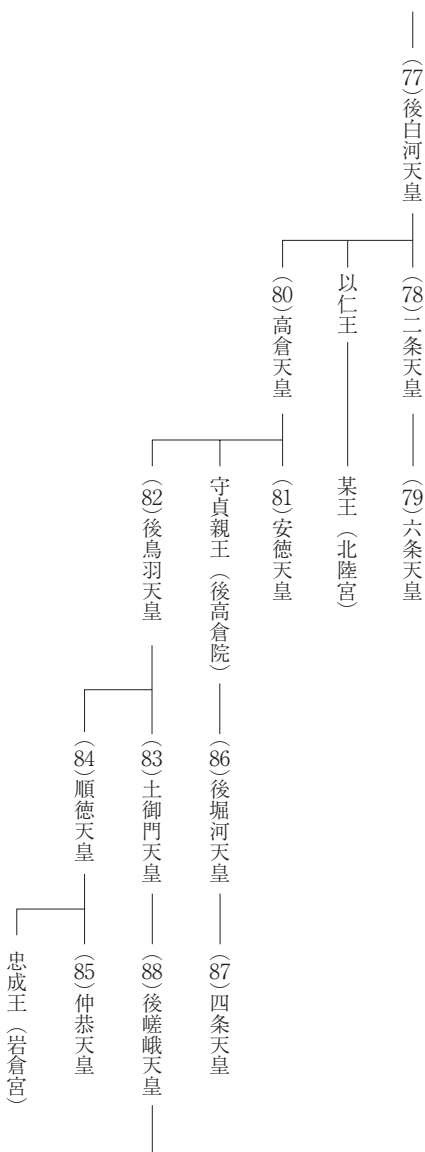


図 7

の九条家に引き取られたので九条廃帝あるいは半帝と呼ばれていた。この天皇は一八七〇（明治三）年になって仲恭天皇と諡号が贈られ歴代に数えられるようになった。この場合も、土御門―順徳と兄弟相続であったが、治天の後鳥羽は兄の土御門が乱に消極的であり、弟の順徳が積極的に荷担していたので、順徳の皇子を即位させたといわれている。もし承久の乱が成功していれば、順徳の皇統が連続していたかも知れない。しかし、承久の乱の戦後処理として鎌倉幕府は後鳥羽の皇統を排除して、皇統を一世前に遡り高倉天皇の皇子行助法親王Ⅱ後高倉院（安德の異母弟、後鳥羽の異母兄）の第三皇子を即位させた。これが後堀河天皇である。しかし、この皇統も次の四条天皇が嗣子なく没したので後世には続かなかった。（図7参照）

一天皇を廃位し、三上皇を鳥流しにして立てた後高倉院の皇統が後堀川・四条で絶えたため、幕府には限られた選択肢しか残されていなかった。すなわち、土御門の皇子か順徳の皇子か、である。有力廷臣たちは後者の即位を望んだが、幕府は倒幕に積極的だった順徳の皇統を選ばず、土御門の皇統を選んで即位させた。これが、南北朝の起因となった持明院統の後深草天皇、大覚寺統の龜山天皇の父親になる後嵯峨天皇であった。

ここまでを総括すると、長子相続が一般的ではなく、また衛生状態や疾病などで短命に終わる場合も多かった古代・中世にあつては、①兄弟相続が広く行われていたこと、②有力廷臣との力関係・婚姻関係などの結びつき、③生母の家格などによって皇位継承が左右された。また④院政期に入れば、「治世の君」あるいは「治天」と呼ばれた天皇家の家長の意志が大きな決定要因となったが、概して幼帝が多く（摂関全盛期は幼帝に代わって摂政が政務を執り、院政期には父親である治天が政務を総覧することが常態化していた）皇子が生まれていなかった場合も多く、兄弟相続が広くおこなわれていた。そこには皇子の生母が治天の寵妃であつたかどうかというような個人的な好悪の感情や政治的配慮、政治的力関係などの要因も介在する余地があつた。こうして、一時的に皇統が迭立したり、両帝並立が起こりえたわけである。しかし、それはいずれの場合も結果的には比較的短い時間で解消された。しかし、後述するように、後嵯峨以降、皇統の迭立が常態化し、分裂する事態へと発展していく。

#### 南北朝期の前提―皇統迭立から分裂へ

後嵯峨天皇が即位した事情は前記の通りであつたが、即位当時すでに二三歳になっており、その歳まで元服も親王宣下もないままであつた。もし四条天皇が長命で後嗣があれば日の目を見ることなく終わった可能性があつた。その人を選んで皇位につけたのは鎌倉幕府であり、後嵯峨はそのことを強く自覚していたといわれて

いる。

後嵯峨は在位四年あまりで第二皇子に譲位した。これが後深草天皇であるがまだ四歳であり、後嵯峨が治天として院政を敷いた。後深草の皇太子には同母弟が立ち、治天の意思で譲位が行われた。これが亀山天皇である。この場合も兄弟相統であり、さらに治天の好悪の情が介在して問題を複雑化していく。亀山の皇太子にはその第二皇子が立った。これが後の後宇多天皇である。後嵯峨が没すると亀山の親政がしばらく続き、後宇多への譲位が行われ、亀山が治天となり院政を敷いた。このことは後述するように、後嵯峨と二人の生母が、兄後深草の皇統ではなく、弟亀山の皇統を受け継ぐものとして選らんだ、と亀山の皇統すなわち大覚寺統が自らの正統性を主張する根拠となった。これを後嵯峨の「素意」「遺詔」と呼ぶ。両親は温和しく従順な兄よりも、剛毅な性格の弟に期待をかけていたといわれている。これは後嵯峨が没したとき次の「治世の君」は幕府の意向に従うよう言い残したが、後深草、亀山ともに次代の治天たるべく争ったので、幕府は後嵯峨の意向を正妻で両者の実母である大宮院に質した。その結果、亀山の親政となり、そしてその後、後宇多が立太子し即位し、亀山の院政となった。しかし、亀山院政は幕府の霜月騒動との関連で、肅正された安達泰盛との関係を疑われ動揺した。こうして一二八二（弘安一〇）年幕府から、天皇と治天の交代要求が為された。つまり幕府が積極的に介入して後深草院政への転換が図られたのである。さらに、後宇多の皇太子にも幕府の要求で後深草の第一皇子が立ち、鎌倉將軍へも後深草の皇子が送られたわけであるから、幕府はこの時持明院統寄りの立場を採っていたといえよう。こうして、次には後深草の子が立太子し即位し伏見天皇となった。その皇太子にはその皇子が立って即位し後伏見天皇となった。この時、後深草、伏見の院政になり、そのように計らったのは幕府だったのだから、結果的に両統のバランスをとったといえる。しかし、伏見の院政も朝廷の実力者で関東申継の西園寺実兼との不和などから安定せず、実兼は大覚寺統に接近して一三〇一（正安三）年、

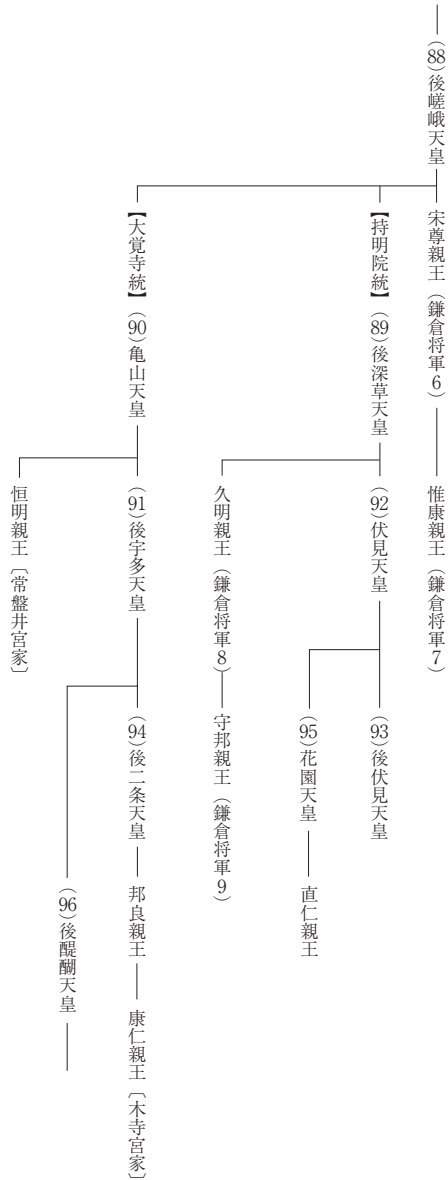


図 8

今度は幕府は持明院統の治天・天皇の交代を要求し、大覚寺統から後二条が即位して後宇多の院政が始まった。これで振り子は大覚寺統に戻った。その後、持明院統の花園、大覚寺統の後醍醐というように両統迭立が定着していくかと思われた（両天皇とも即位当時は父である上皇の院政）。(図8参照)

この両統迭立は言い換えれば二つのことを意味していた。まず第一に、どちらか一方の皇統が永続的に排除されることはなくなったわけであるから、自派にとって有利にするには、相手の天皇の在位期間をできるだけ短くすること、第二に次の皇太子あるいはその次の皇太子を自派から出すことが最も重要な関心事であり、その実現のために、鎌倉に特使を派遣して相手の非や自派の利益を訴えるという手段がとられた。結果的に天皇

家が政治的、経済的に分裂することは幕府にとっては一概に悪いことではない。貴族社会は平安末期から鎌倉時代にかけて氏族集団から家が分立していった。藤原北家摂関流は近衛・九条・松殿の三家に分かれて、さらに松殿は消滅し近衛から鷹司が、九条から一条、二条が分かれて五摂家へと固定化してゆく。天皇家もこうした傾向の中にあつたといえるかも知れない。

このことと関連して、皇統が分裂しそれが固定化していく要因として、後嵯峨はもう一つ重大な決定をしていった。それは正嫡であるにもかかわらず皇統から排除される予定の後深草に対して天皇家に集積された一群の膨大な荘園を相続させたことである。これが長講堂領といわれる大荘園群である。いわば、永続的な経済基盤を与える代わりに皇位継承を諦めよというわけである。後深草は後にこれを後伏見に譲渡し、以降、いわゆる持明院統の経済基盤となった。これとは反対に治天の地位を確保し、自らの皇子に皇位を継承させた亀山はこの時点で独自の荘園群は保持していなかった。さらに、後深草は亀山から後宇多への皇位継承に失望して出家の意向を示すと、幕府は後深草への同情からその第二皇子を後宇多の皇太子に立てた。これが即位して伏見天皇となり、皇太子にはその第一皇子が立ち即位して後伏見天皇となった。伏見の時は後深草が治天となり院政を敷き、後伏見の時は伏見が治天で院政を敷いた。つまり、今度は立場が逆転し、持明院統全盛時代が出現したわけである。しかも長講堂領という経済基盤も兼備していたことから、大覚寺統は経済的にも不利な状況におかれていたが、後に亀山も八条院領と呼ばれる大荘園群を相続し大覚寺統の経済基盤とした。こうして両統迭立が固定化していく。

しかし、両統を比較すると、持明院統の場合は大覚寺統の後二条天皇の皇太子には伏見の第三皇子を立てた。理由は後伏見がまだ一三歳で皇子が誕生していなかったためであるが、後伏見に皇子が誕生すると、持明院統の中でも伏見と後伏見の間で皇統が分裂する可能性が生じる。これを防ぐために、治天である伏見は皇太子を

後伏見の猶子にしている（つまり、後伏見は弟を名目的に自分の子供にしているということ）。猶子とは本来の意味は兄弟の子という意味であるが、日本の場合は平安時代から鎌倉時代にかけて皇族、貴族、武家の間で盛んに行われた「擬制的」な親子関係のことである。これによって持明院統内部の皇統の再分裂を防ごうとしたのである。

これに対して、大覚寺統の方は内部に複雑な事情を抱えていた。大覚寺統の総領権は亀山から後宇多へと受け継がれた。持明院統の後伏見の後、大覚寺統の後宇多の第一皇子が後二条天皇となった。しかし、この後二条天皇が早世し、後を持明院統の花園天皇が受け継いだ。ところが、亀山は晩年にもうけた恒明親王を偏愛し、花園の皇太子には、嫡系である後二条の皇子邦良親王ではなく、恒明を立てることを後二条に命じた（亀山の「素意」「遺詔」）。つまり、大覚寺統は亀山の皇統と後宇多の皇統に再分裂する可能性が出てきたのである。しかし、亀山はそれを見届けることなく没し、恒明は後ろ盾を失い即位の可能性がなくなり、後宇多の代での皇統再分裂は回避された。問題は花園の皇太子に大覚寺統から誰を立てるかであった。後宇多の意志は自らの嫡孫である邦良親王（後二条の皇子）が本命であったが、まだ当時九歳であったため、後二条の弟尊治親王を立てた。これが後醍醐天皇である。これによって、一二歳の花園天皇の皇太子に二一歳の尊治が立つという年齢の逆転現象が生じた。この措置は邦良が若年で病弱であったことと、将来にわたり恒明の即位の可能性の芽を摘むことが狙いであったと思われるが、後宇多の意志が大覚寺統の皇統を後二条―邦良に一元化することになったことが後醍醐にとつては重大問題であった。つまり、後醍醐は大覚寺統の嫡流である邦良が成人するまでの「中継ぎ」の天皇であり、自分の子供に皇位を伝えることはそのままではできない「一代主」とされていたのである。後宇多の所領などの処分状には、一切を尊治（後醍醐）に譲ると書かれた後、「後二条院長嫡として相承すべきのところ、不慮に崩御す。御悲嘆尽きるなし。」と正嫡の突然の死を嘆いた後、「尊治…



引用者) 一期ののち、ことごとく邦良親王に譲与すべし。尊治親王子孫においては、賢明の器・濟世の才あらば、しばらく親王として朝に仕え君を輔けよ。天下の謳歌、虞舜・夏禹のごとくんば、皇祖の冥鑒に任すべし。僭乱の私曲あるなかれ。後二条院の宮をもつて実子のごとくすべし。ゆめゆめ保護せしめよ。ことに孝行を存じ、朕が志をなすべし。」と後醍醐が大覚寺統の「一代主」に過ぎないことが明言されていた。父亀山の晩年に弟恒明の出生によって、自己の正嫡たる地位が揺らいだ後宇多は、後二条一邦良を大覚寺統の正嫡として皇統を伝える意志を明らかにしたことになる(後宇多の「素意」「遺詔」)。

ところで、伏見の死後、皇太子をめぐる両統の激しい対立の中で、政治的判断を任された幕府は、皇位継承に一定のルールを定めた、いわば仲裁案を両統に示した。

① 花園が皇太子尊治に譲位すること

② 在位年数をおよそ一〇年とし、両統交代すること

③ 次の皇太子は邦良とし、その次は量仁(光厳)とすること

これがいわゆる「文保の和談」といわれるものであるが、これは近年では合意に達しなかった話し合いに終わったものとの評価が一般的である。そうすると、両統迭立のルールが確立しないまま、後醍醐は即位はするが、邦良が皇太子になったということは、後醍醐は邦良が即位するまでの「中継ぎ」の存在に過ぎないという立場には変化がないことを意味する。後宇多はまた、病弱の邦良の同母弟邦省親王を内裏で元服させ、万一の場合も後二条一邦省を大覚寺統の正嫡とする考えがあったと推測される。

迭立がこのまま続けば、後醍醐の後には持明院統からという順番であったが、後宇多の幕府への工作の結果、後醍醐の皇太子には邦良が立てられたが、後宇多はその即位を見ることなく没し、邦良も没してしまった。そのため皇太子には幕府の意向もあり持明院統から後伏見の第一皇子が立てられた。これが北朝の祖となった光

厳天皇である。

これらの経緯から、後醍醐の鎌倉幕府倒滅の企ては王政復古の「理想」からばかりでなく、天皇位を自らの皇統で一元化する意図があったと考えるべきであろう。この点について、皇国史観はこれを激しく否定する。例えばその最も代表的論者である平泉澄の『建武中興の本義』では、「しかるに世間には又不思議の説あつて、天皇倒幕の御動機を以て、全く御私情よりいでたるものと主張している。」と批判し、いわゆる「文保の和談」は不成立に終わったと指摘する。<sup>(9)</sup>したがって、後醍醐の違約は成立しないと主張する。さらに次のように指摘する。<sup>(10)</sup>

次にはまた文保御和談を云々せずして、単に邦良親王御早世の後、後醍醐天皇は御自身の皇子を太子に立てようと欲し給うたのに、持明院統が幕府に勸説せる結果、幕府は後伏見上皇の皇子量仁親王を皇太子とし奉つたので、天皇は深く幕府の干渉を憤り給ひ遂に関東の討伐を企て給うたのであるとする説がある。

この点について平泉は後醍醐の倒幕の企ては量仁（光厳天皇）立太子の遙か以前からのものなのでこれに当たらな<sup>(11)</sup>いと主張する。文保の和談について平泉は、一〇年での迭立を前提にすれば、後醍醐は在位五年で邦良に譲位しそれも五年で量仁に譲位するべきであるがそうはならなかったということで和談自体が不成立であったという結論を導き出している。結果的にそれは正しい。しかし、そのことが平泉のいう「全く御私情よりいでたるもの」ではなかったということの証明にはならない。さらに、先に引用した後宇多の「讓状案」は「一三〇八年の九月に尊治（後醍醐）が立太子するいわば「条件」として書かれたものと考えられ、それは一三二四年の後宇多の死まで後醍醐を縛る外的規制であった。後宇多が死んだのが六月で正中の変が九月であ

る。したがって、倒幕の企てがそれ以前からなされていたという平泉の指摘は正しいが、ここでもそれが「天皇位を自らの皇統で一元化する意図があった」ことを否定する根拠にはならないと考える。

ともあれ幕府を倒して建武政権を立てた後醍醐はその後、尊氏に叛かれ吉野に脱出して南朝を立て、後村上に譲位する。「復位した」後醍醐に廃位された光厳の後、尊氏はその弟光明天皇を立て北朝が成立する<sup>(12)</sup>。こうして南北朝の対立期に入ってゆくことになる。

ここまで後嵯峨天皇以降の皇統迭立の経過を見てきたが、主な原因は院政を前提として若年での天皇即位が多かったため、皇子が生まれていないことや、治天の皇子が兄弟相続することが多かったことなどが挙げられる。平安時代中期は摂関家が婚姻関係を媒介にした外戚として天皇家をコントロールすることに重点があり、その意味では朝廷内部の主導権争いの結果皇位が迭立状態になってしまうことがあった。しかし摂関家としては天皇の外戚となつて摂関になることが重要なのであつて、迭立状態はその過程が生み出した結果に過ぎない。ところが、鎌倉時代の両統迭立は兄弟相続という要素は似ているが、それぞれ経済基盤を備えた党派としての側面を強く持っていた。そして介入してくる政治権力が摂関家や有力貴族といった朝廷の内部勢力ではなく幕府という外部に存在する異質の武家政権であつたことが決定的に異なつていた。つまり、幕府にとって迭立は朝廷をコントロールするには格好のシステムであつた。何しろ、両派から自派に有利になるように相手を批判、非難してくるのであるから、間に立つて幕府に有利なように、あるいは不利にならないよう、時には両派がバランスし拮抗し合うように適当に対応すればよいわけである。また、問題を複雑にしたのは、迭立が続くと廷臣（貴族）たちもそれぞれ両統どちらかに付くようになっていったことである。さらに一つの家の中から兄弟が別れてどちらかに付くような場合もでてきた。こうして持明院統と太覚寺統の迭立は互いに相容れない皇統分裂となつて固定化する傾向を示していった。この矛盾を一気に「解消」しようとしたのが後醍醐天皇に

よる倒幕と建武政權の樹立であったが、結局短期間で失敗に終わり、皇統分裂が長期間にわたって固定化し武力による打倒をめざす南北朝時代へと突入していったわけである。

## 第二章 南北朝正閏論争の焦点―国定教科書・教師用教科書における歴史記述

### 一 正閏論争の争点―南朝正統論者は何を問題としたか

さて、以上見てきた経緯で両統迭立から皇統分裂に至ったわけであるが、その歴史的過程を学校教育の現場でどのように教えていくかが問題となったわけである。では南北朝正閏論争で、国定教科書・教師用教科書の歴史記述を問題視した「告発者」<sup>13</sup> 南朝正統論者たちは一体何を問題視したのであるうか。論争の渦中で出版された『南北朝正閏論纂』という論文集・資料集がある。これは南北朝に関する様々な論文や史料を網羅した六〇〇頁を超える大部の本であるが、これをみれば、南朝正統論の立場から何が問題とされたかが明らかにされている。その「緒論」は次のように述べている。

そも／＼南北朝の分立は、その遠因を尋ねれば、後嵯峨天皇の遺詔に淵源せりと申すべく、その遺詔を奉ぜざりし持明院統と大覚寺統との迭立に端を発したりしかども、大覚寺統なる後醍醐天皇が北条氏の攻撃を避けて笠置山に籠もり給ひたりし時、北条氏は持明院統なる光厳天皇を即位せしめ奉りしが、後醍醐天皇隠岐より中国に還り給ひて、光厳天皇の皇位を認め給はず、之を退位せしめ給ひしに、北条氏滅び、建武中興の業成りて後、更に足利尊氏の叛逆ありて、後醍醐天皇平安城を脱け出で給ひしかば、足利氏は北条氏が光厳天皇を立てまゐらせし故智にならひて、光厳の御弟光明天皇を即位せしめまゐらせしによりて、こゝに分

立の形勢は明白となれりき。…（中略）…同時に二天皇の対立有るは、我が国体の断じて許さざる所なれば、その何れの皇位が正統にましますかは、明かに論究せざるべからず。南朝若し正統たらざらむか、北朝は正統たらざるべからず。北朝若し正統たらざらむか、南朝は正統足らざるべからず。此れに於いてか正閏問題は起る。南北朝正閏問題は、我が国体に関する大問題なり。

要するに、①後嵯峨の「遺詔」があつたにもかかわらず、幕府が介入して兩統迭立に持ち込んだこと、②元弘の時、北条氏が光厳を踐祚させたこと、③建武の時、尊氏が光明を踐祚させたこと、この三点に絞られるであろう。

そして南朝正統論が、大きな流れになった契機は「水戸の修史事業」（『大日本史』の編纂事業のことー引用者）で、それは「卓抜の見少からず、その南朝正統論は国史界の一大鉄案なりき。爾来、これに対して葉殆ど反駁の声を聞くこと少きのみか、皇室の式微を慨き、幕府の専横に心よからざる一部の人士は、みな南朝忠臣の義烈に泣きて、王政復古の快拳を他日に期しつゝありしに、果して時期は到れり。開港に関する幕府の措置は、天下の志士を激昂せしめて、幕府は滅亡し、明治の新政は開かれぬ。…（中略）…明治の朝廷は、南朝の正統を認めさせられたり。建武中興及び南朝方の功勲ありし者には贈位の恩寵あるに到れり。国民教育は、この聖旨を体して行はれたり、かくて南朝正統はますます一般国民の信ずる所となれり。」<sup>13</sup>ということとなった。しかし「国定教科書編纂委員は平地に波瀾を起した<sup>14</sup>」と批判する。

ここには、正閏論争が何故、引き起こされたかが明確に記されている。つまり、明治維新・王政復古は建武新政に倣って起こされたもので、その原動力となったイデオロギーは『大日本史』に表された尊皇思想であり、倒幕派の志士たちは「みな南朝忠臣の義烈に泣きて、王政復古の快拳」を目指した。そして、それは南朝正統

史観に起源を持つ、ということである。国定教科書・教師用教科書はそれを曖昧にし、否定したので正閏論争が起こった、という認識である。『大日本史』の歴史認識が検討されなければならない理由がここにある。しかし、それはそれで大きな問題群をなしているので、全面的に検討することは別稿に譲り、本稿では必要な論点に応じて検討するにとどめたい。

では以下、整理した論点にそつて両者の議論をおつてみよう。

### 両統迭立の記述をめぐつて

南朝正統論者はそもそも「国定教科書」の「第二十三章の鼈頭には、南北両朝の対立という文字を掲げた<sup>(16)</sup>り」ということを非難している。しかし、国定教科書には「南北両朝の対立」という表現は出てこない。教科書の二三章の見出しは「南北朝」とあるだけであり、そこには「さきに鎌倉幕府のなほ盛なりし頃、後深草、龜山の両天皇は御兄弟にて相つぎて位に即き給ひき。<sup>(17)</sup>其の後両天皇の御子孫かはるがはる皇位を継がせらるゝの例始り、両統の御不和もまたしたがつて起れり。」とあるが、傍線部分がそれに当たるといふのであろうか。前述の如く両統が並存し、互いに不和であつたことはこれまでみてきたとおり歴史的事実である。<sup>(18)</sup>そして「編者は更に其の教科書の教師用において其の所見を反復敷衍せり。」<sup>(19)</sup>として、「教師用教科書」を次のように引用している。

後嵯峨天皇は御位を御子後深草天皇に譲りて上皇となり給ひしが、上皇は殊に望を天皇の御弟龜山天皇の御後をして永く皇統を継がしめ給はんとて、天皇の御子後宇多天皇を父帝の後と定め給へり。後深草上皇は之を悦び給はず、幕府亦上皇の御心を察し奉り、後嵯峨上皇崩御の後、後深草上皇の御子を後宇多天皇の皇

太子となし奉りき。是より後、遂には後深草、龜山両天皇の御子代る代る天位に即き給ふの例始り、随ひて両皇統の御不和漸く甚しくなれり。

また、「教師用教科書」の備考には次のように記述されている。（なお頁数は教師用の頁数）

後深草、龜山の両天皇は御兄弟を以て相繼ぎて即位し給へり。龜山天皇は御弟にましましけれど天資英邁にましませしかば、御父後嵯峨上皇殊に之を愛し給ひ、御深草天皇が御年十七歳なりし時に、天皇に勸めて位を之に譲らしめ給ひしなり。此の時龜山天皇は御年僅に十一歳にてましましき。しかのみならず、後嵯峨上皇は龜山天皇の御子孫をして永く皇位を繼承せしめんとの叡慮にて、後深草上皇の御子孫には永く皇位を絶たしめんとし給へり。龜山天皇の次に御子後宇多天皇の即位し給ひしは、かゝる事情あるが為なりき。<sup>(20)</sup>  
（同上百十九頁）

後嵯峨上皇は薙髪して法皇となり給ひしが、尚親ら政を院中に聴き給ひ、法皇の崩後には龜山天皇万機を親裁し、天皇御讓位の後には引続き院政を聴き給ひて、後深草上皇は毫も与り給ふ所なかりき。上皇もと考友和順にましませしが、事情のかくの如きを見て怏々として樂しみ給はず。幕府の執権北條時宗も亦後深草上皇の嫡長の御身にましまし、而も何等の御失徳もなきにかゝる御有様なるを痛はしく思ひて、龜山上皇に奏請し、後深草上皇の皇子をたて、後宇多天皇の皇太子となし奉れり。伏見天皇是なり。<sup>(21)</sup>  
（同上百二十頁）

持明院統は常に幕府に頼り、大覚寺統は王政の復古を希望し給ふの傾あり。両統間の御反目は時を経ると



共に益々甚だしく、時明院統の花園天皇の次に大覚寺統の後醍醐天皇立ち給ふに及びて、遂に建武中興を見るに至れり。<sup>(22)</sup>（同上百二十一頁）

批判者は「編者が後嵯峨天皇の遺詔を認め、持明院統の皇位に即き給ひしは幕府の計らひなることを認めるは、これにて明けし。」<sup>(23)</sup>と結論づけている。

「両統間の御反目」と記しているのは、児童用の教科書ではなくて、教師用のテキストの備考であつた。

つまり、治天たる後嵯峨の意志が亀山の皇統に天皇位を継がせることにあつたことは、国定教科書の編者も認めており、後深草の皇統は幕府の計らいで即位したので、両統迭立は幕府の意図したことであり、大覚寺統こそが正統な王権であるというわけである。

ここで改めて、国定教科書と教師用テキストの歴史叙述を検討してみると、今日の南北朝史の通説的理解を提示していることが確認できる。問題は後嵯峨の「遺詔」なるものであるが、これは後述するように明文としては存在せず、後嵯峨自身が即位の経緯から幕府の意向を付度する態度を示し、自らの意志が亀山の皇統に天皇位を継がせることにあることを明示できなかったことであつた。そこで幕府では後嵯峨の妃で両天皇の実母である大宮院に伺いを立てて、亀山の後、後宇多が即位し、亀山の院政となつた次第である。この歴史叙述は先に引用したように、国定教科書と教師用テキストともに過不足無く、簡潔に、客観的に記述している。

では次に、後嵯峨の「遺詔」について詳しく検討してみよう。

## 後嵯峨の「遺詔」

これは当時治天であつた後嵯峨の意志＝「素意」がどちらにあつたかという問題であり、両統迭立のそもそ



もの原因であった。先述のように、明文化されたものはなかったようで、幕府は兄弟の生母大宮院に問い合わせ、龜山の皇統にあったとされた。ただし、このことには持明院統からは疑義が呈されていた。その疑義には根拠がある。この「遺詔」について言及しているものに『増鏡』と『梅松論』があるが、特に後者は次のように「遺詔」の時期と内容が詳しく述べられている<sup>(24)</sup>。

後嵯峨院寛元年中に崩御の刻、遺勅に宣く、一の御子後深草院御即位あるへし、おりゐの後は長講堂領百八十ヶ所を御領として、後子孫永く在位の望をやめらるへし、次に二の御子龜山院御即位ありて、御治世は累代敢て断絶あるへからず、子細有に依て也と御遺命あり、

しかし、寛元年中は崩御の年ではなく、後深草への譲位の時である。しかも「事實は、天皇（後嵯峨のこと―引用者）は崩御の約一箇月前の文永九年正月十五日に御領の処分状を認められたに過ぎない<sup>(25)</sup>」というのが現在の通説的理解である。そしてそのことは『五代帝王物語』にも次のように述べられており、事情は明らかである<sup>(26)</sup>。

抑御治世、上中御処分いかゞ御計有らんと、上も下も覚束なく侍しに、御遺誠とて御忌中の程は披露なし、五旬の、ち、女院の御方にて御附属状をひらかれて、前左府筆を執て御方々の御分書わけて、奉行院司親朝々臣を御使にて内裏・新院へ参らせらる、されとも御治世の事は関東計申すへし、六勝寺・鳥羽殿なども御治世につくへしよしを仰をかる、さて関東へは仁治に踐祚ありし事は泰時計申たりしかは其例違ふへからず、彼例に任て内裏・新院の間、いつれにても計ひ申へしと宸筆の勅書にてつかはさる

このように、「治世の君」に関しては内裏（龜山天皇）とも新院（後深草上皇）とも明言せず、ただ関東（幕府）の計らい次第であるとして「宸筆の勅書」で幕府に伝えたのである。そこで、幕府は大宮院に問い合わせ、龜山の親政と決したというのが真相である。つまり、後嵯峨は「治世の君」の決定権を幕府に委ねたわけであり、それが龜山の親政に決まるに当たって生母大宮院の発言が重視された。大覚寺統はこれを後嵯峨の「素志」「遺詔」といい、持明院統は逆にそれを認めない理由はここにあった。つまり、龜山の治世とその子孫に皇統を占めさせるという内容を遺言した厳密な意味での「遺詔」はなかったと考えられる。

しかも、「遺詔」が絶対視されないことは、前述のごとく大覚寺統の後宇多、後醍醐自身がそれを無視したことで「実証」されている。龜山は晩年にもうけた恒明親王を偏愛し、恒明の皇統を大覚寺統の嫡流とする「遺詔」を残し、後宇多も龜山在世中はそれに従っていたが、龜山の死後それを反故にして自分の嫡子、嫡孫である後二条一邦良の皇統を嫡流とし、後醍醐を「一代主」とし、後醍醐死後は邦良の皇統に全てを譲るように「遺詔」を残している。しかし、前述の如く後醍醐もそれを反故にしている。

このように、「遺詔」が絶対的なものではなく、治天や天皇の個人的都合によって反故にされることは度々あったわけであり（後三条の白川への「遺詔」も反故にされていることは前述の通りである。）、「治世の君」が天皇親政なのか、治天による院政なのかは、幕府によって左右されることが常態化していたのが後嵯峨以降の状況であった。従って、後嵯峨の「遺詔」を正統性の唯一の根拠とする大覚寺統の立場にも瑕疵はあったといわざるを得ない。

#### 光厳踐祚を認めるか

さて、元弘の変で幕府に捕らえられた後醍醐は隠岐に流されたわけだが、南朝正統論はそもそも光厳の即位

自体を認めない。「後醍醐天皇が北条氏の攻撃を避けて笠置山に籠もり給ひたりし時、北条氏は持明院統なる光厳天皇を即位せしめ奉りしが、後醍醐天皇隠岐より中国に還り給ひて、光厳天皇の皇位を認め給はず、之を退位せしめ給ひ」と前述の「緒論」にあるとおりである。この点について教師用テキストは次のように記述している。<sup>(27)</sup>

龜山天皇の御孫なる後醍醐天皇が北條氏を滅さんとし給ふに当り、北條高時は後深草天皇の御孫なる花園上皇の院宣により、同じく後深草天皇の御曾孫なる光厳天皇を踐祚せしめ奉りしなり。抑々院政始りてより政治は大抵院宣によりて行はれ、院宣は詔よりも重く、院の思召によりて天位を左右し給ふこともありて、遂に御父子御兄弟の間に保元の乱の如き事変を醸成したることあり、又安徳天皇が平氏に擁せられて西海に幸し給ひし時、後白河法皇の院宣によりて京都に後鳥羽天皇の立ち給ひしこともありき。高時が花園上皇の院宣を請ひて光厳天皇を擁立し奉りしも亦此の先例によりしなり。

天皇幕府の兵に追求せられ、後遂に隠岐に遷され給ふ。初め天皇の京都を出で給ふや、高時花園上皇の院宣によりて皇太子を踐祚せしめ奉れり。之を光厳天皇と申す。神器なくして踐祚し給ふは後鳥羽天皇の故事によれるなり。後醍醐天皇は幕府の請によりて神器を新帝に授け給ひしが、神器のみは常に御身に帯び給ひて隠岐遷幸の際にも離し給はざりけりと云ふ。

これに対して、南朝正統論からは次のような批判がなされている。<sup>(28)</sup>

院の思召によりて天位を左右し給ひしことは、なるほど国史に例なきにあらず。然れども、たとひ院宣にせよ、現在天皇が讓位し給ふにもあらず、崩御し給ひしにもあらざるに、その京都にましまさぬの故を以て、更に天皇を即位せしめらるゝことは、正当の事にあらじ。殊に光嚴天皇の擁立せられ給ひしは、後醍醐天皇が北條氏の暴逆なるを憎みて討伐を企て給ひ、軍略上の都合にて、京都を脱出し給へる間に乗じて、かねて相親近し奉れる持明院統の天皇を立て申したるものにして、かの安徳天皇の御幼弱にましまして、外戚なる平氏のために拉し去られ給ひしあとに、後白河法皇の院宣によりて後鳥羽天皇の即位し給ひしとは、事情甚だ異にして、同日に論すべきにあらず。編者はこれをしも同一視し奉れるなり。

これに対して、教科書の編纂委員で執筆者の喜田貞吉は『国史の教育』、第二章「御歴代の数特に南北朝の關係に就いて」において次のように反論している。<sup>29)</sup>

南北兩朝の分立は、光明天皇が京都にて御位にましゝ、之に對し後醍醐天皇が吉野にお遷りになつて、依然天皇にまします事を御主張遊ばしてから後の事である。南北朝五十七年と数へるのも、必ず此の時から以降である。随つて其の以前に御位にましました光嚴天皇は、決して北朝の君ではない。それ故に、北畠親房の神皇正統記の筆法によつて、全く此の御方の御位を認めないならば、それも一つの見方であるけれども、已に其の御位を認めるならば、それは北朝の君としてではなく、南北朝以前の君として其の御治世を定め奉らねばならぬ。さては後醍醐天皇との御關係が甚だむつかしい解釈を要する事となるのである。議論は別として、先ず其の事實の有りの儘を述べて見よう。後醍醐天皇六波羅を避けて笠置に赴き給ふや、幕府は、寿永の昔安徳天皇が平家に擁せられて西海に赴き給ひし後、後白河上皇の院宣によつて後鳥羽天皇を立て給ひし故事によつ

て、花園天皇の院宣を請ひ、皇太子量仁親王を踐祚せしめ奉ったのが即ち此の君である。して見れば、此の場合に於ける光厳天皇の御地位は、少くも寿永當時の後鳥羽天皇と同等と申し奉らねばならぬ。其の後、光厳天皇は後醍醐天皇より三種の神器をお受になった。尋いで立派に即位の礼をもお挙げになった。尤も其の三種の神器の中に、八坂瓊曲玉のみは擬器であつて、真の神璽は後醍醐天皇が御身を離さず隠岐まで御携帯であつたとの説もある事であるから、三体具足しなかつたとしても、兎に角後醍醐天皇より之を受けさせられ、三種の中二種までも御伝へなされとすれば、單純に神器の所在を以て皇位の正不正を論ずる筆法よりしても、天皇の御位を絶対に否認する事はできない。況や後醍醐天皇の隠岐にまし／＼た間は、事實に於て主權を行はせられず、光厳天皇が天が下を治しめされたのであつた点から見ても、此の天皇を御歴代に列し奉るが正当と解せらる。故に、今仮りに、後醍醐天皇が隠岐にしました儘、又光厳天皇が京都にて天が下を治しめされた儘、永く変更がなかつたと想像したならば、此の天皇の御位に就いては後世何の疑問も起らなかつたであらう。然るに、事實は然らず、勤王の軍が勢を得て武家政治は忽ちに滅び、光厳天皇は伯耆よりの詔命によつて御位を退かれ、後醍醐天皇は天子巡守より還幸せらるゝ御儀式を以て京都に還られ、再び御代治しめされたのである。而して、此の際齊明天皇や称徳天皇の御場合の如く、重祚の式を行ひ給はなかつたのである。然らば後醍醐天皇の御位は、無論此の隠岐にしました間も引続いたものであつて、此の間光厳天皇と重複して居た事となるのみならず、後醍醐天皇は伯耆より遙に詔して光厳天皇を廢し、天皇の正慶の年号をも取消して、もとの建武に復し、天皇御治世間に行はれた総ての政治も皆もとに戻され、全く光厳天皇を御認めにならない。

「醍醐天皇の隠岐にまし／＼た間は、事實に於て主權を行はせられず、光厳天皇が天が下を治しめされたのであつた点から見ても、此の天皇を御歴代に列し奉るが正当と解せらる。」と在位を認める立場を明らかにし

ている。そして「光厳天皇は伯耆よりの詔命によつて御位を退かれ、後醍醐天皇は天子巡守より還幸せらるゝ御儀式を以て京都に還られ、再び御代治しめされたのである。而して、此の際斉明天皇や称徳天皇の御場合の如く、重祚の式を行ひ給はなかつたのである。然らば後醍醐天皇の御位は、無論此の隱岐にましました間も引続いたものであつて、此の間光厳天皇と重複して居た事となる。」と後醍醐の引き続く在位も認めている。これは「事実の有りの儘」に則した両帝並立論といふべきものである。また、喜田の立場の継承者である村田正志も次のように同様の見解を示している<sup>(31)</sup>。

南北両朝はどこまでも其の対立を認め奉り、是と同様に、光厳天皇の御位と後醍醐天皇の御位とをも共に認め奉るを穩当とする。前にも述べた通り、斯くの如きの事は軽々に論斷すべきものではないから、苟も疑のある場合には、先づ敬を厚うして共に之を存するを穩当と思ふ。

ここで注意すべきは、喜田は（そして村田も）後醍醐を重祚したとは見ていないことである。北朝正統史觀では「是に於て後醍醐天皇と光厳天皇との御位の關係に就いて、復問題が起つた。此の時光明天皇の方では、光厳天皇の御在位を認め、九十五代後醍醐天皇、九十六代光厳天皇、九十七代後の後醍醐天皇、九十八代光明天皇と、後醍醐天皇を重祚と見なし、二代の天皇として数へ奉つた趣に拝見する。後の後醍醐天皇とは、古文書などにも散見する所である。」<sup>(32)</sup>と考える。

抑々御歴代を数へるに、南北朝の場合にあつては南朝に依つて数へるか、北朝に依つて数へるかと云ふ根本の問題がある。文部省の国定教科書には、南北両朝に就いて輕重を附していない。即ち双方五分五分の筆

法を用ひてあるのである。近時世に行はれる普通の書には、大抵南朝を正当とし、北朝を閏位とし、随つて御代数を南朝によつて数へた場合が多い。併しながら是は到底一個の私事であつて、さう簡単に定め得べきものではない。文部省が双方五分五分の筆法を用ひたのは、是は充分慎重なる研究を重ねた結果である。宮内省で何とか御発表があれば格別、臣民の分として皇室の歴史を書くには、何れにも充分の敬意を表し、斯く対等のものとして記し奉るの外はあるまい。

これが喜田に代表される当時の文部省の見解であり、<sup>(33)</sup>それに基づいて国定教科書が書かれたわけである。喜田の立場も「宮内省で何とか御発表があれば格別、臣民の分として皇室の歴史を書くには、何れにも充分の敬意を表し、斯く対等のものとして記し奉るの外はあるまい」という政治的配慮をしているわけだが、客観的事実関係は正確に記述されている。

#### 光明踐祚

両朝並立論の立場は、光厳の踐祚を認めるが、それは南北朝以前の踐祚であるにとらえているのは、前述の通りである。そうすると、南北朝期の始まりは、尊氏の反旗により建武新政が崩壊し後醍醐が光明に讓位を強要され、その後、吉野に逃れて朝廷を開いて以降のこととなる。

この点について、教師用テキストは次のように記述されている。<sup>(34)</sup>

尊氏の京都に入るや、更に光厳上皇の院宣を請ひて上皇の御弟を御位に即け奉れり。之を光明天皇と申す。

さらにその備考において次のように詳説している。<sup>(36)</sup>

尊氏の京都に入るや、光厳上皇及び其の御弟豊仁親王を奉じ、錦旗を掲げて兵を進む。是に於て已に兩朝並立の形勢あり。幾ばくもなく尊氏更に上皇の院宣を請ひて親王を踐祚せしめ奉れり。之を光明天皇と申す。

これに対して、南朝正統論は

足利尊氏の叛逆は誰か之を疑はむ。後醍醐天皇は尊氏の叛逆を鎮めむとて玉体を風雨にさらし宸襟を討伐に悩まし給へり。尊氏の賊名を避けむがために院宣を請ひ、錦旗を押し立つること、何ぞ其の狡黠なる。然れども尊氏の賊名は千古万古拭ふべからざるなり。而して光明天皇は此の逆賊の擁立し奉れるならずや。…(中略)…本書の編者は、南北の兩朝を全く対等視して日本臣民の脳裡印象せしめむと欲したりしなり。

と批判し、さらに、南朝正統論にとって最も重要な論点を提起する。<sup>(37)</sup>

されど、国に同時に二天皇なかるべきことを信条とし、国体を重んじ、大義を明かにせむと欲する者、誰か此の熟慮を欠ける歴史観に首肯すべき。

つまり、後醍醐に叛逆した尊氏の立てた光明は正統な天皇ではなく、日本に同時に二人の天皇が存在することは国体に反する、ということになる。これは南朝正統論者の常套句であるが、事実の問題ではなくイデオロ



ギーの問題である。

光明踐祚の正統性について喜田は次のように説明している。<sup>(38)</sup>

後醍醐天皇は伯耆より遙に詔して光厳天皇を廃し、天皇の正慶の年号をも取消して、もとの建武に復し、天皇御治世間に行はれた総ての政治も皆もとに戻され、全く光厳天皇を御認めにならない。而して、其の之を御廃しになるも、之を廃するとは仰せられなかった。廃したのであつて見れば、廃せられるまでは当然天皇であるけれども、廃したとは仰せられないで、皇太子が、後醍醐天皇御巡幸中に種々の政治をなされたものだと御理解であつた。随つて光厳天皇の御遜位は、天皇が其の御位を退かれたのではなく、皇太子たる量仁親王が謙讓の徳に富んで自ら其の位を辞せられたのであると解釈された。そこで、後醍醐天皇は前皇太子たる量仁親王に太上天皇の尊号を奉られたのである。是は皇位を踏まれざる敦成親王を直ちに太上天皇に准じ、小一条院と称し奉つた例によられた事と思ふ。されば後醍醐天皇の御代が此の儘永續したならば、光厳天皇と云ふ御方は全く御歴代から消えてしまつて、猶小一条院の如く、天位踐まれざる太上天皇として史上に伝はり、後醍醐天皇の御位に就いては、何の疑問も起らなかつた筈である。然るに天皇は足利尊氏の鋒を避けて延暦寺に行幸になり、尊氏は寿永（後鳥羽擁立）建武（光厳擁立）二度の例により、光厳上皇の院宣を請うて光明天皇を擁立し奉つた。のみならず、後醍醐天皇は尊氏から逼られたとは申せ、三種の神器を光明天皇に伝へ給ひ、光明天皇からは太上天皇の尊号をまで受けさせられたのである。

ここにおける喜田の論理は分かりにくい。喜田は前述の如く、光厳の在位を認めるわけであるが、後醍醐はそれを認めない。その後醍醐のロジックを次のように述べている。つまり、隠岐に流され、京都に帰還するま

でを「巡幸」とし、後醍醐はその間も在位している。そしてその間、皇太子（光厳）が天皇（後醍醐）に代わって政治を行ったが、天皇が帰還したので皇太子は謙讓の徳に富んでいたもので自らその地位を退いた。そこで天皇は前皇太子に太上天皇の尊号を贈った。これは小一条院の例に倣ったものだ。

これは後醍醐側の説明をそのまま肯定しているようであるが、後醍醐が光厳を太上天皇Ⅱ上皇として遇したことを重視している。ここがポイントで、この文脈を受けて「然るに天皇は足利尊氏の鋒を避けて延暦寺に行幸になり、尊氏は寿永（後鳥羽擁立）建武（光厳擁立）二度の例により、光厳上皇の院宣を請うて光明天皇を擁立し奉った。」と主張するのである。後醍醐が光厳を上皇とし、その光厳上皇の院宣を受けて光明が即位したわけであるから、それは手続きのにも「適法」な践祚であったということになる。

喜田の説明は、光明の践祚は後醍醐側のロジックでも「適法」な践祚であり、光厳の在位を認める喜田の立場からはなお一層「適法」であると主張していると考えてよい。「のみならず、後醍醐天皇は尊氏から逼られたとは申せ、三種の神器を光明天皇に伝へ給ひ、光明天皇からは太上天皇の尊号をまで受けさせられたのである。」<sup>39</sup>というのはダメ押しのように感じられる。

この点について、村田正志は「要するに後醍醐天皇は光明天皇の践祚を認められず、光明天皇は後醍醐天皇の退位を認められたのである。これが天皇両立の現実の様相なのである。南朝正統論者がこの現実の様相に目を蔽ひ、一概に南朝を正、北朝を閏と呼称するのは歴史事実<sup>39</sup>に即せぬ論議と評せざるを得ぬのである。」と歴史的事実に沿って歴史を叙述すべきだと述べているのである。

### 神器の所在と南朝正統論

三種の神器を南北朝どちらが保持しているかが正統性を決定づける根拠であることが『大日本史』以来主張

されてきており、正閏論でもこの点が重要視され、北朝光明に渡された神器は偽器であり、真の神器は一貫して南朝に保持されていたと南朝側は主張しており、南朝を正統と認める人々もそれを根拠にしている。従って、神器の所在という問題は正閏論争では重要な論点なのだが、これについては当否・真贋を判断することは極めて困難である。以下、この点を詳細に検討している梶山林継「南北朝神器授受始末」<sup>(40)</sup>も参考にしながらまとめておきたい。

そもそも神器は皇位継承（踐祚）の際に継承されるもので、鏡と剣は崇神天皇の時に宮中を出て、鏡は伊勢神宮の神体とされ、宮中のものはその形代であり、剣も日本武尊の手を経て草薙剣として熱田神宮に納められており、宮中のものは形代である。そして宮中の形代の神器も度重なる火災で焼失した。最初の内裏の火災は九六〇（天徳四）年でこの時は鏡の本体は焼け残ったとされている。次は一〇〇五（寛弘二）年で、この時形を失ったとされる。保管櫃の中にはその焼け残りが入っているともいわれている。その後もたびたび内裏は火災にあっているが鏡が新造された記録はない。剣と璽は持ち出されて無事であったとされている。これが宮中にあった神器であるが、それらは平家の都落ちの時、宮中から持ち出され、平家滅亡の折、壇ノ浦に沈んだが、璽（勾玉）は箱に入っていて浮き上がり回収されたとされている。そしてその璽は後醍醐が常に身につけていたとされている。しかし、神器の真贋については後醍醐以降、曖昧な点が多くあり、事実を確かめる事は不可能といわざるを得ないが、事情の大体は以下のとおりである。

まず光厳踐祚の時は、一三三一（元弘元）年八月に後醍醐が京都を脱出した時神器も携行し笠置に籠城したが、後醍醐は周知のように六波羅に捕らわれて京都に帰還したが、その間に後伏見の院宣で光厳が踐祚した。六波羅側は宇治で後醍醐に神器を渡すよう迫ったが、後醍醐の抵抗にあいそのまま六波羅に到着した。『太平記』によれば、後醍醐は「内侍所（鏡）をば笠置の本堂に捨て置き奉りしかば、定めて戦場の灰燼にこそ落さ

せ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時、木の枝に懸け置きしかば」と述べたと伝えている。そして剣は「しばらくも御身を放たる事あるまじきなり」と述べている。ここにすでに、神器を持明院統に渡すまいとする後醍醐の強い意図を読み取ることができる。光厳側では後醍醐が本物の神器を渡すか疑っていたので、剣璽役を務めたことのある正親町三条実継も加わってこれを検知した。それによると、櫃二個に納れられ、御冠箱の台の上に置かれ、封がしてあったが、これを解いてみると、相違はなく破損もなかったとされている。鏡は笠置の本堂に捨て置いたということからか、この時光厳に渡された神器は剣璽のみであった。鏡がどうなったかは資料的には定かではないが、後醍醐が隠岐を脱出し政権を奪還した際、持明院統の光厳、後伏見、花園が六波羅に移った時、「内侍所（鏡）同じく渡御」と『皇年代略記』にあるが、これが笠置に置き捨てられたものを回収したのか、新調されたものかは定かではない。そして三人は北条一族と共に東国へ逃れる途中、近江で護良親王軍に捕らわれて京都に送られる。この時、『太平記』には神器も護良側に接収されたことが記されている。ところが、『皇年代略記』では「賢所（鏡）はあらかじめ禁中に御座する」とある。これは六波羅から近江に逃れる時、女官が沙汰して西園寺公宗の北山第に移しておいたものを禁中に移したものであるとされている。さらに、璽は後醍醐が常に身に付けていたという記事が『増鏡』に見える。そのため、京都に戻った後醍醐は重祚ではなく、「遠き御幸の環御」という形式で内裏に入ったのである。つまり、後醍醐が終始一貫在位しており、光厳の踐祚を認めない根拠が「璽の箱」を常に保持していたことに求めているのである。つまり、後醍醐が本物を抜き取り、偽物にすり替えて光厳に渡した事になる。『皇年代略記』には「神璽いささか子細あり、云々」と記されているのはこのことを示唆しているのであろうか。

しかし、建武の新政も尊氏の叛逆によって崩壊し、後醍醐は光明への譲位を強要され、神器を渡した。しかも後醍醐は比叡山を下りる前に、皇太子恒良に譲位したとされている。これらの点について中世史家の林屋辰

三郎は次のように述べている<sup>(41)</sup>。

一般にこのとき光明院に授けられた神器について、真偽の両説が行われている。『太平記』では、「先三種神器ヲ、当今ノ御方ヘ渡サルベキ由ヲ申サレケレバ、主上兼テヨリ御用意有ケル、偽セ物ヲ取り易テ、内侍ノ方ヘゾ渡サレケル」と、はっきり偽器であったと主張している。『太平記』のこの話は、遷幸の途次において、直義が五百余騎にて参向し、神器引渡しを迫ったというのであるから、『皇年代略記』などの伝えるところとは、かなり異なっており、にわかには信じがたい。しかし天皇が花山院において光明院に授けたものは、北畠親房の『神皇正統記』、洞院公賢の『園太暦』などの記述から見て、だいたい偽器と見てさしつかえないようである。もしそうだとすると、後醍醐天皇は、尊氏よりはるかに謀略的であったことになる。なぜならば、天皇は山門（延暦寺ー引用者）でも、新田義貞をなだめる意味で、東宮恒良親王に讓位したのであり、いくら「事騒ガシキ受禪ノ儀」でも、受禪とあれば当然剣璽渡御が行われたはずであって、ここでも真偽不明の神器を授けたことになっている。

この恒良親王は越前からさかんに綸旨を発していることが知られている。綸旨は天皇の意志を伝える文書形式であり、恒良本人はもとより新田方でも真の神器を受けた新帝と認識していたと思われる。つまり、後醍醐は尊氏の勧めに従って比叡山を下りる決定をしたため、結果的に切り捨てることになる新田義貞を納得させるために、偽器を渡して偽帝を作り出したわけである。林屋も指摘するように「この時期に天皇は三人できたことになる」<sup>(42)</sup>のである。これを正統を守るための不屈の意志の表れと評価するか、半世紀を超える戦乱を生み出した妄執のなせる業と見るか評価の分かれるところである。

いずれにせよ、以上見てきたように、後醍醐・南朝側は眞の神器を保持し、光明に渡されたものは偽器であつたと、南朝側が主張し、正平一統の際、その偽器といわれた北朝の神器も南朝に接收されたので、後光厳の践祚に際しては神器の継承はいかなる意味でもなかったことは事実であつた。光明、後円融、後小松は神器なしで践祚し、前二者には在位中神器は継承されなかつた。そして後小松の在位中に両朝合一がなされ、南朝が保持していた神器は北朝に接收された。このことから、北朝六代の天皇の中でも、光厳、光明、崇光の三代と後光厳、後円融、合一前の後小松を区別する議論も存在する。しかし、光厳の時、本物の璽は後醍醐が保持したまま隠岐に流されたのであり、光厳が渡された神器の中、剣だけが疑いを持たれないものであつたが、三種揃わず、光明に渡された神器は全体が偽器であつたのであるから、南朝からいえば、北朝六代全てが偽主ということになる。

しかし、神器に関してはここまでふれたように、不明な事情が多くあり、実物を科学的に調査する事が不可能なことを前提とすれば、これ以上の詮索は必要ではないだろう。今日の歴史研究にとって「神器の在る所必ず正統にして、正統の所に必ず神器あり」とは南朝正統論者のイデオロギー・言説に過ぎない。

また、南朝正統論者はいわゆる「明徳の和談」（南北朝合一のこと）により正統な南朝の天皇から神器が北朝の後小松に「父子の礼」をもつて渡された事で「讓位」されたとしている。もちろん、南朝正統論者からはそれ以前の後小松は正統な天皇とみなされていない。代表的な論考として菊池謙二郎の「皇室と大日本史」<sup>(43)</sup>には次のように書かれている。

後龜山天皇より、後小松天皇へ御讓位は、父子の礼を以て神器を御授受あらせられ、此にて南朝の正統は後小松天皇に伝はつたといふにある。即ち南北合一と称する事は、内心実情の如何に係らず、大義を正しう

し、名分を明かにして、正統の帝位が後小松天皇に伝はり、京都の方は此に於て名実兼ね備はつた天皇を戴く事になつたといふにある。

しかし、実際には後小松は安徳天皇の時に平家によつて西海に持ち出され、剣を除いて回収された神器が京都に帰還した時の例に従つて使いを後亀山のもとに使わして接收したというのが実際であり、南朝正統論者が主張するように「父子の礼」をもつて讓位がおこなわれたというわけではない。つまりここは、南朝正統論者は南北朝合一が北朝による南朝の事実上の接收であつたという歴史的事実を認めない、ということの意味する。

### 「忠臣」の再評価と顕彰

後述するように、南朝正統論が近世になつて台頭してくる契機は楠木正成の再評価であるが、やはり何と言つても徳川光圀の『大日本史』編纂事業が決定的であつた。いわゆる、三大特筆はすべて光圀によつて決定された。藤田東湖の有名な『修史始末』には次のように述べられている。<sup>(4)</sup>

神功皇后を后妃に列し（即位したものとはみなさない）、大友皇子を本紀に掲げ（即位したものともみなす）、正朔を南朝に撃け（南朝が正統）、三種神器京師に入るに及び、始めて統を後小松帝に帰す（南北朝合一後の後小松は正統の天皇）の如きは、皆公（光圀のこと）の卓見なり。正統の義、史官或は公を規する者あり、公聴さずして曰く、唯この一事、某の為に仮借せよ。天下後世、我を罰する者ありと雖も、大義の存する所、我豈曲筆せんや。



光圀の南朝正統にかけ強い思いが伝わる場所であるが、修史事業Ⅱ「史料を収集整理してそれに基づき歴史を記述すること」の難しさは、元弘（後醍醐・隠岐配流前後の時代）から元中（南朝の元号で後龜山の時代）にかけての神器の所在と真贋の問題は上記のような次第であるから、実物を確かめる術はない以上、史料文獻的に事実を確定していかなければならない。しかし、それが光圀が言うほど簡単ではなかった。だからこそ、「史官或は公を規す者あり」という状況が生じた。それに対して、「公聴さずして曰く、唯この一事、某の爲に仮借せよ。天下後世、我を罰する者ありと雖も、大義の存する所、我豈曲筆せんや」というのである。つまり、（神器を保持しているという理由で）後醍醐・南朝側に大義が存するので、自分のためにこの点だけは深く追求せずに歴史叙述せよ、と光圀は命じているのである。そして、「大義の存する所、我豈曲筆せんや」という一節に論理的整合性はない。光圀にとつて南朝に大義が存することはア priori な前提なのである。本稿の冒頭で村田正志の「南朝正統論は史論でありながら必ずしも史実に立脚しようとはせずに、思想問題として取り扱われる傾向が強い。思想としての南朝正統論は、調査や研究の結果ではなく、はじめから既成概念として決定している」<sup>(45)</sup>という一節を引用しておいたが、これはまさに『大日本史』編纂における光圀の立場を言い当てている。

そして、光圀のこうした主張を支えているのが楠木正成をはじめとする南朝の「忠臣」たちの顕彰である。南朝正統論者たちは明治維新が未完に終わった建武新政の再現であり、それを成功させた勤王の志士たちは楠木正成をはじめとする南朝の「忠臣」たちを崇拜しており自己の規範としていたと主張する。さらに進んで、劣勢の南朝に何もとめることなくただ忠義を尽くして死ぬまで戦った楠木正成親子を日本人（臣民）の模範だと位置づけるのである。



### 第三章 「国体論」の形成と天皇と「忠臣」の政治神話

#### 一 前期水戸学から後期水戸学・近代水戸学への転換

『大日本史』の評価にかかわる本質的な論点として、光圀と水戸学の史臣たちの政治的立場をどう評価するかという問題は長い間多様に論じられてきた。光圀が朝廷を君主と仰ぎ、幕府を宗家とする尊皇思想を抱いていたことは事実である。そして南朝正統論が武家政権＝幕府の否定の論理を内在させていたことも事実である。しかし、それでは光圀と水戸学の史臣たちが幕府を否定し天皇親政の政治体制を指向していたのかといえば、決してそうではない。光圀は徳川宗家＝將軍家の連枝であり、水戸藩は幕府によって領地を安堵されて存在しているわけであり、幕府を否定することは直ちに自己否定につながってしまうからである。

したがって、江戸初期・中期の儒者たちは「何故朝廷の支配が崩壊し、武家に政権が移ったのか」（言い換えれば武家政権の正当性と正統性）というアポリアと論理的・思想的に格闘しなければならなかった。そこで導き出されてきたのが「為政者の失徳」というロジックであり、孟子の易姓革命論をアブリオリに導入することではなく、それを論理的に穏やかに援用する、という歴史観の形成であったと考える。すなわち、政治権力の本来の保持者である天皇の失徳（例えば陽成天皇の例）があり、摂関家が政治権力を接収した（藤原基経の例）。しかし摂関家を外戚に持たない後三条天皇の即位とその子白川が院政を開始し権力を摂関家から取り戻した。しかし、白川・鳥羽・後白河・後鳥羽ら治天の相次ぐ失徳で権力が武家に移動した。そして、後醍醐は英明で剛毅な天皇で一時的にはその権力を武家から取り戻し「本来の姿」＝天皇親政に戻したが、これも政策の失敗や寵姫を偏愛するなど失徳によって失敗し再度武家に政権が移り、以降固定化した、という歴史観である。そして、国制上における天皇制と幕府の存在の矛盾を回避するために、武家が獲得した権力とは摂関が保

持していた権力であり、それを天皇の依嘱によって武家が代行するというロジックは征夷大將軍という名目と矛盾しない、という立場である。さらにいえば、天皇と朝廷は幕府を權威付け正当化するだけの、實力を持たない形式的存在であればよいわけであるから、家康から秀忠時代にかけて幕府が朝廷に押しつけた一連の措置はその目的に沿ったものであった。その將軍家の連枝である水戸徳川家の基本的立場はいわゆる「尊皇敬慕」であり、それが水戸学の本質であるという解釈が成り立ちうるわけである。征夷大將軍が外交呼称として「日本国王号」を使用すべきだと主張した新井白石も国制上の二つの中心の關係を以上のように理解していたことは前稿で明らかにした通りである。<sup>(46)</sup>これが大かたの前期水戸学の性格である。

次に、後期水戸学についてである。その時代は『大日本史』の編纂事業の上では志表の編纂を含む全体の完成が大きな課題であったが、その性格については菊池謙二郎と尾藤正英の理解は両者の思想的立場の違いを超えて軌を一にしている。戦前を代表する水戸学研究者である菊池謙二郎は「水戸学といふ語は二様の意義に解せらるゝが如し。一は初代威公以来水戸藩に伝來し展開したる学風全般を指し、一は弘道館記に叙述せられたる教義信条を謂ふ。」<sup>(47)</sup>と述べ、菊池は「余の見る所を以てすれば、前説は取るべからず。水戸学といへば必ず後者なるべきを疑はず」<sup>(48)</sup>と断定している。いわゆる後期水戸学こそが水戸学であると主張している。戦後、丸山眞男以降の近世思想史家として水戸学研究に大きな足跡を残した尾藤正英は「水戸学あるいは水府の学とは、江戸時代後期の水戸藩に發達した独自の学風を指して、当時の人々が用いた名称であつて、また天保学とも呼ばれていることからすれば、ほぼ天保年間の前後から、この学風が広く世間の注目を集めるようになったのであろう」<sup>(49)</sup>と述べ、水戸学の定義としては同じく後期水戸学をいうと定義している。菊池は正閏論争の起こった時、水戸教育学会の代表として南朝正統論の急先鋒であり、代表的論客として積極的な役割を果たしていることが本稿との關係では重要である。

後期水戸学に関しては稿を改めて論じたいが、尊皇攘夷を高唱して倒幕の思想的バック・グラウンドをなしたわけであるが、ここでは近代に入って後期水戸学を継承した人々といわゆる皇国史観の言説に焦点を当ててそれらが国体論の形成にどのような役割を果たしたかを論理的に明らかにしたい。本稿では戦前期を代表する論者として高須芳次朗の『水戸学派の尊王論及び経綸』、平泉澄の『建武中興の本義』<sup>(50)</sup>、建武義会編『後醍醐天皇奉賛論文集』<sup>(51)</sup>の内容を検討したい。なぜならば、それらの主張が水戸学（後期水戸学）と皇国史観との直接的関係をよく示していると考ええるからである。

<sup>(53)</sup> 高須の水戸学理解は光圀の尊王論が敬幕ではなく「斥覇」（＝倒幕の思想的根拠）につながった事を強調する。<sup>(54)</sup>

義公も事実、朝廷を君主、幕府を本家と仰ぎ、尊皇敬幕の旨を実行し、之を以て、水戸家の伝統としたわけであるが、『大日本史』の思想その物から来った結論は、全然、義公の敬幕主義に反してゐる。…（中略）…それが『大日本史』の上に結晶したのであるから、その思想的結論が、どうなるかといふことは、たとひ、義公において、全然予想せざりしにもせよ、必然、尊皇斥覇の思想を伴生せざるを得ない。そしてこの事は、今日から見ると、義公の美所であるばかりでなく、これあればこそ、明治の皇政復古を実現するイデオロギーを供給すること、なったのである。

つまり、傍線部分がポイントなのだが、『大日本史』の歴史観は「尊皇斥覇」の思想を生み出し、それが明治維新のイデオロギーの源泉になったと主張する。<sup>(54)</sup>

率直にいふと、大義名分といふ以上、既に將軍政治の存在は、許されない。たとひ、それを抽象理念とするも、そこから生み出される思想は「天に二日なく、地に二王なし」といふことにほかならない。とすれば、日本国体上、將軍といふ名のもとに、事実、天下を支配することは、大義を破り、名分を紊すことである。即ち將軍政治が大義名分に反する以上、之を否定するのが必然の帰結であらねばならない。」

したがって、大義名分上幕府の存在は許されない、という結論になる。この点は光圀や前期水戸学の議論とは異なっているが、これが幕末の尊皇攘夷運動から倒幕へと到った政治変動の根拠的理由ということになる。そして、南北朝正閏論争でも強く主張されたのだが、それは未完に終わった建武新政こそがその原型であり、維新の推進力だった尊皇の志士たちは建武の理想を維新で実現したというロジックになる。前掲『後醍醐天皇奉賛論文集』所収の鳥巢通明「建武中興の精神と明治維新」という論文では「とにかく吉野時代の史実によって感激せしめられ、鼓舞せられたことは、幕末の志士一般に共通するところであった。」と両者の関係について述べている。<sup>(55)</sup>さらに次のように述べている。<sup>(56)</sup>

建武中興、それこそわが国に於ける倒幕の唯一の経験であった。彼等がこの歴史を注意ぶかく研究したの  
は当然である。その時彼等をかりたてたのは銜学的興味ではなく、実践的な関心であった。…（中略）…今、  
内憂外患の日に、国体を護持せんがために現状打破を企図した彼等は、そこに、かつての日の国歩困難に際  
して、ひとしく、国体護持に捨身懸命した人々を見出し、それにならひ、その志を継承せむとしたのである。

この点を最も端的に主張したのが皇国史観の代表的論者である平泉澄である。『建武中興の本義』の第一章

「日本中興の御理想」において「問題は幕府の存在が国体と矛盾するか否かの一点に存するのである。」と主張する。<sup>(57)</sup>平泉はもちろん矛盾するからこそ維新が行われたと解するわけである。その南朝正統論者にとって明治維新を国体護持と位置づけるのは一九三〇年以降の時局柄とも関係しているが、南朝の「忠臣」こそが、日本臣民の「あるべき姿」であった。この点について、平泉澄は同論文で次のように両者の関係を主張している。<sup>(58)</sup>

まことに明治維新の大業は、これ日本の日本たらしとする大理想の実現であつたのである。しかるに日本にほんたらしとする大理想は、之に先だつ事数百年、後醍醐天皇によつて掲げられ、楠木正成を始めとして幾多忠烈の士の、生命を捨て家を失ひ、一切を犠牲にして之を護りし為に、暴風雨の中にも空高く翻る事数十年、しかも時利あらず、その大旆は遂に倒されて了つたのであつた。明治維新の志士はこの一度倒されたる大旆、日本の日本たらしめんとする大旆を、再び高く中天に掲げんとしたるもの、即ち特に具体的にいふならば、正成の遺志を継承せんとしたのであつた。

その南朝正統論者のロジックは以上のように、建武新政は明治維新の未完の原型であり、維新の志士たちは楠木正成の遺志を継ぐ者というものという位置づけであつた。

さらに、南朝正統論そのものについて前出高須は次のように述べている。<sup>(59)</sup>

例へば、三大特筆の一とせられる南朝正位説は、義公が世論を排し、史臣の反対をも抑へ付けて、極力、主張したところであつた。かく南朝正位といふことを明白にする以上は、勢ひ尊皇思想を強力に喚起せざるを得ない。のみならず、足利高氏の叛逆思想を厳かに弾斥せざるを得ぬのである。高氏は、極端に霸道を行

ひ、霸道実現のためにあらゆる無道を敢てし、あらゆる策略を濫用して悔るなかつた。故に高氏云為悉く排撃せねばならぬとすると、斥覇といふ考へが力強く台頭し来らざるを得ぬのである。」

さらに、建武新政崩壊の原因について次のように主張している。<sup>(60)</sup>

(一) 承久之乱後、封建制度が固められ、武家政治の根柢が確定的とたつたこと、(二) 郡県制を布く前に足利高氏が素早く叛旗を翻したこと、(三) 武士階級に大義名分の意味を知るものが極めて少数だつたことに基づく。

左様した活勢を見ないで、すべてを後醍醐天皇の失徳に帰するが如きは、余りに当時の活勢を知らなかつたと云はねばならない。」

『大日本史』はその南朝正統史観にも関わらず、特に削除された『論賛』も含めて後に別稿で明らかにするように後醍醐天皇とその属する大覚寺統への評価が厳しいという特徴がある。正閏論争での南朝正統論者や後の皇国史観(両者には思想的つながりが大きいと筆者は考えているが)では新政失敗の原因を尊氏の叛意と武士たちの所領に関する物欲(つまり現実的利益の重視)に帰しているのが特徴である。高須のいうように、天皇絶対を前提とすると、武士たちが立脚していた封建的土地所有を否定することは論理的には一貫性がある。しかしその反対概念として郡県制をもつてくるのは、それが具体的に何を意味するのか明確ではないが、古代的法律令制国家をいうのか、始皇帝の時代の皇帝専制体制をいうのか断定できないが、歴史観としては「復古」を指向していることは明確である。

この点を最も明確に主張しているのが平泉澄である。昭和戦前期に活発な言論活動を展開した平泉は、一九三九年（昭和一四）年が後醍醐天皇六百年祭に当たることから『後醍醐天皇奉賛論文集』を建武義会が出版した際、「後醍醐天皇と建武の中興」という巻頭論文を書いている。その冒頭部分で平泉は次のように主張している。<sup>(61)</sup>

足利は建武中興の大業を破壊せんが為に、初めより周到なる用意を以てのぞみ、…（中略）…しかも其の叛逆は、単に北条足利両氏のみの問題ではない。天下の大多数之に荷担し、之に屈服した以上、その責は正に天下大多數の負ふ所でなければならないのである。しかるに斯くの如き深刻なる反省は、其の後長く欠けてゐた。

そして北条泰時の善政を称えたり、尊氏に対する度量広大の評価が続いて「逆賊却つて大政治家の美名をほしいま、にし」てきたと批判する。さらに<sup>(62)</sup>

之に反して後醍醐天皇に対し奉つては、或は其の倒幕の御企、実は御自身の皇子を太子に立て給はんが為にして起つたとして、如何にも叡慮に御私あるが如くに論じ、或いはまた建武中興の失敗、一に帝徳の不足より発し、専ら宮中に御責任あるが如くに説き、種々の非難誹謗の声、容易にやまないのである。

と本稿第一章で指摘した諸点が「非難誹謗」であると主張する。<sup>(63)</sup>そして特に「建武中興の失敗、一に帝徳の不足より発し」というところを論破することに力を注いでいる。ここでは紙幅の関係上詳しくはふれられない

が平泉は次のように結論づけている。<sup>(64)</sup>

建武中興の失敗の原因が、從來屢々説かれたやうに、後醍醐天皇の御不徳、御不明に在るのではない事は、是に於いて明かになつた。しからば眞の原因は何処に在るかといへば、それはいふまでもなく足利高氏の謀叛に在り、高氏に荷担してその謀叛を成さしめた諸豪族の二心に在り、其等の徒輩に横行闊歩を許容したる国民大多數の無関心無自覚に在り、而して通じて之を概観すれば私利私欲をほしいまま、にして大義正道を忘却せる者上下に充満して、遂に、天皇が皇國中興の聖業を、その成就の直後に於いて傾覆し奉つた點に在つたのである。

新政失敗の原因を尊氏（名を敢えて高氏と記すところにも高須と共通の心情が感じられる）の叛逆と武士の態度に求めるところは高須の議論と共通であるが、もう一つ重要なポイントは下線部後半部分にある。つまり、後醍醐の理想を理解しなかつた大多數の人々が私利私欲に奔つたためだと批判しているのである。

高須がいわゆる後期水戸学派と異なっているところは、『論贊』に体する評価で「大義に殉ずること、名分を正すことが、日本国民の最高の道であり、それが人々を不朽ならしめ、光輝あらしむる所以なることを論贊の上に表示した。」<sup>(65)</sup>と述べてさらに続けて次のように主張する。<sup>(66)</sup>

蓋し眞に大義名分に殉ずるものは、何ら報酬を求めず、現世の栄華にも意を置かない。彼等に取つては、大義に殉ずること、名分を正すこと、それ自身が、万世一系の皇室を戴く国民の一員として最上の感激だ。榮譽だ。そこに彼等の衷心の快感がある。左様した崇高美は欧米人、支那人らが一般に理解しないところで



あるが、真に日本において大義に殉じ、名分を正す人は、必ず右の如き精神において、十分の満足を得てゐる。それ以外、何ら求むるところなく、欲するところがない。かの大楠公の如き、その最後は悲痛を極めたが、「七たび生れ變つて、高氏らの如き国賊を亡ぼさねばやまぬ。」と云つたのをみると、大楠公は誠忠をつくしたと其の事に、彼自身、限らない感激と満足とを得て死んだのである。」

「七生報国」を正成の言にしていることなど誤りはあるが、あるいは意図的にそう書いているとも思われる。「大楠公は誠忠をつくしたと其の事に、彼自身、限らない感激と満足とを得て死んだのである。」とは、皇国史観（そして、その具体的事例としての靖国の思想）と直線的につながる議論である。

そしてその議論の真に意図するところは、国体論なのである。天皇による絶対的な親政という価値観をアプリオリに肯定するわけであるから、摂関政治や幕府の存在は否定されなければならない。<sup>67</sup>

蓋し藤原の摂関政治は、律令の根本義たる皇政の精神に一致しない點が多かつた。皇道の上から見た藤原政治は、末梢的形式主義で人材登用の門を塞ぎ、一切の政治機関を殆ど行詰らせ、国民の幸福を冷眼視する存在だった。それは大体において藤原一門の榮華を主意として地方民から搾取する政治を行ったにすぎない。それらの弊害を一掃しようといふ精神のもとに院政の開始を見たが、それとても、政治上の権力が院政に帰したのは、白川、鳥羽両院々政時代だけに留つてゐた。かうして藤原政治は、皇政の精神と一致しない點が少くなかつたのである。…（中略）…

藤原政治の衰頽に伴つて台頭した武家政治は、藤原氏の如く、文弱の弊はなかつたが、武健に偏り、幕府の武断専制主義のもとに、守護、地頭を諸国に置いて、皇政の精神に一致しない霸道政治を行つた。且つ兵

馬の権を私して勢力を京都に伸ばし、承久の乱におけるが如き不臣の態度に出たり、或は皇位継承のことも容喙するが如き潜上の行為に出た。この点において武家政治の存在は、皇道の根本精神に合致しないものと云はねばならなかつた。…（中略）…

故に日本国体の觀念に起つて大義名分の上から藤原政治、武家政治を考察すると、断じてその存在を許容し難い。

こうして、後醍醐の建武新政の歴史的意味は徳川幕府を崩壊させた明治維新の未完に終わった原型と評価されるのである。

## 二 国体論の第二の柱「忠臣」顕彰

極端な天皇絶対思想の他にもう一つ『大日本史』の南朝正統論が後世に与えた大きな影響は「楠公崇拜」に代表される「忠臣顕彰」である。

時代の変動要因であつた武士たちの中でも、南朝正統論者の新田義貞一族、名和長年一族、菊池武俊一族、就中、楠木正成とその一党への評価は極めて高い。湊川神社の正成の顕彰碑が光圀によって建立されたことは周知の事実である。また、光圀の師であり賓客でもあつた朱舜水是正成を高く評価していた。そして初期の『大日本史』執筆編纂に深く関わつた三宅観瀾も同様である。いわゆる後期水戸学といわれる藤田幽谷、東湖、相沢正志斎、青山拙斎などの楠公崇拜もよく知られている。この点について高須は次のように述べている。<sup>(68)</sup>

惟ふに、正成において敬重すべき點は、その用兵の巧妙にある。腹の底からの勇氣を備へたところにある。

が、その独自の所長は、皇室に全身・全力を捧げて、何ら求むるところがない純忠にある。昔から用兵に巧みなもの、ずば抜けた勇気を有するものはいくらかあるけれども、正成の如き純忠を有するものは割に少い。皆何らか求むるところのあるものが大多数を占めてゐる。：（中略）：ところが、大楠公は勿論、小楠公も何ら求めるところがなく、誠忠そのものだ。茲に彼等の偉大さがある。

南朝正統論を支える大きな柱が楠木正成「忠臣」論である。ここは光圀の「君、以て君たらざるといへども、臣、臣たらざるべからず」という思想と照応している。

光圀は後醍醐を正統となし、嫡流の光厳の北朝を閏統とした。光圀は朱子学的な正名思想とは異質な日本的君臣関係Ⅱ君主の絶対性と臣下の無条件の服従を求めた。楠公崇拜・忠臣顕彰はここにこそその意味を見いだすべきである。

易姓革命を認めず、君主に君主としての道德的責任も求めない光圀は、後醍醐が「現任」の天皇であり、光厳への譲位に同意せず、神器も保持していたとされたため、正統な天皇とし、後村上への譲位も認め南朝を正統とした。そしてその南朝への絶対的忠誠を求め、それを実践した楠木一党を「忠臣」として顕彰したのである。君主への代償を求めない絶対的な忠誠、無条件の服従こそ後の皇国史観の中心的価値観である。それは『大日本史』の直接的影響下に育まれたものであった。

こうした議論は『太平記』の記述をそのまま史実としてとらえた感の強い『大日本史』の特徴であり、後期水戸学とその近代の継承者たちにも受け継がれている。そこでは『梅松論』の「正成、深慮遠謀の勇士たりし事」の一節などは無視される<sup>69</sup>。

湊川の軍破れしかば御陳は御下向の兵庫の奥の御堂にてぞ有りし。高尾張守の手の者討取し間、正成が頸持參せられける。実檢あり。まざるべきにあらず。

哀れなるかな。去春、將軍・下御所御両所、兵庫より九州へ御下向のよし京都へ聞えて、叡慮快かりしかば、諸卿一同に「今は何事があるべき」とて悦び申されける。時に正成奏聞して曰、義貞を誅伐せられて尊氏卿を召しかへされて、君臣和睦候へかし。御使においては正成仕らんと申し上げたりければ、不思議のこゝとを申したりとて、さまざま嘲哂ども有りける時、また申し上げ候へけるは、君の先代を亡ぼされしは、併尊氏卿之忠功なり。義貞、関東を落す事は子細なしといへども、天下の諸侍、悉く以て彼將に属す。その証拠は、敗軍の武家には元より在京の輩も扈從して遠行せしめ、君の勝軍をば捨て奉る。爰を以て、徳の無き御事知らしめざるべし。情事の心を案ずるに、両将西国を打靡して、季月の中に賣上り給ふべし。その時は更に禦戦術あるべからず。上に千慮有りといへども、武略の道においては、いやしき正成が申す条たがふべからず。ただいまおぼしめしあはすべし。とて涙を流しければ、実に遠慮の勇士とぞ覺えし。此儀申達たれども、討手として尼が崎に下向して逗留の間に、京都へ申しはいはく、今度は君の戦必ず破るべし。人の心を以、其事をはかるに、去元弘のはじめ、潜在勅命を受けて、俄に金剛山の城に籠しとき、私のはからひにもてなして、国中を憑て其功をなしたりき。爰にしりぬ。皆心ざしを君に通奉し故なり。今度は正成、和泉・河内両国の守護として、勅命を蒙り軍勢をもよほすに、親類一族、猶以難渋の色有り。如何にいはんや国人土民においておや。是則ち天下君を背けること明らけし。しかる間、正成存命無益なり。最前に命を落とすべきよし申し切りたり。最後の振舞符合しければ、まことに賢才武略の勇士ども、かやうの者をや可申とて、敵も御方も惜しまぬ人ぞなかりける。

『梅松論』が足利方に近い者によって書かれたことは事実であり、官方に不都合な記述も多いが、この段は正成が現実をよく見ており、正確な将来的見通しも持っていた戦略家としての能力がよく表現されているが、こうしたエピソードは無視されて、「七生報国」的側面のみが採り上げられ顕彰されていた。同じことが全ての国民に強要されたのがアジア太平洋戦争期の皇国史観であった。

以上見てきたように、南朝正統論は「在るもの」を客観的に歴史叙述するのではなく、「かく在るべし」を主張したという性格が強い。つまり一種のイデオロギーである。

ところで、これらの本が出版された一九三四年から三九年にかけては一体どういう時代であったのであろうか。一九三四年二月には中島久万吉商相が足利尊氏論で菊池武男の攻撃によって辞職に追い込まれ、一〇月には陸軍省が『国防の本義とその強化の提唱』を配付している。いわゆる挙国一致内閣期から第一次近衛内閣期にかけての準戦時体制期である。菊池武男は熊本出身の陸軍中将で、まさに南朝の「忠臣」菊池武時一族の後裔として父親が明治になって叙爵され男爵となった。当時貴族院議員であった。そして菊池はさらに三五年二月に美濃部達吉の学説を攻撃する「天皇機関説事件」を引き起こしている。そしてその結果、岡田内閣による「国体明徴声明」が出されるにいたる。その第一次声明には次のようにある。<sup>⑩</sup>

即ち大日本帝國統治の大權は儼として天皇に存すること明かなり。若し夫れ統治權が天皇に存せずして天皇は之を行使する爲の機關なりと爲すが如きは、是れ全く萬邦無比なる我が國體の本義を愆るものなり。近時憲法學説を繞り國體の本義に關聯して兎角の論議を見るに至れるは寔に遺憾に堪へず。政府は愈々國體の明徴に力を效し、其の精華を發揚せんことを期す。

さらに第二次声明は次のように主張している。<sup>(1)</sup>

抑々我國に於ける統治權の主體が天皇にましますことは我國體の本義にして、帝國臣民の絶対不動の信念なり。帝國憲法の上諭並條章の精神、亦此處に存するものと拝察す。然るに漫りに外國の事例・學說を援いて我國體に擬し、統治權の主體は天皇にましますとせずして國家なりとし、天皇は國家の機關なりとなすが如き、所謂天皇機關説は、神聖なる我が國體に悖り、其の本義を愆るの甚しきものにして嚴に之を芟除せざるべからず。政教其他百般の事項總て萬邦無比なる我國體の本義を基とし、其眞髓を顯揚するを要す。

中島久万吉の事件や天皇機關説が菊池によって引き起こされたことはいかにも象徴的であるが、皇国史観は天皇の絶対性と臣民の滅私奉公を中心の価値観とする。それは久米邦武事件や南北朝正閏論争を始点として形成されはじめ、一九二〇年代には民本主義や左翼思想の広がりのために伏流となったが、一九三〇年代以降に再び大きな流れとなって表出した。そして一九四〇年一月には神武天皇の実在性を実証的に批判した津田左右吉の『神代史の研究』などが発禁処分となる。こうして、アジア太平洋戦争期に国体論は皇国史観という形をとって全ての国民を呪縛したのである。

### まとめにかえて―「荻生徂徠贈位問題」におけるある政治的位相の転換

以上、南北朝正閏問題が『大日本史』の歴史認識を媒介にしながら、国体論の形成に与えた影響について検討してきたが、これを政治上の問題として時の第二次桂内閣打倒の契機としようとした一人が犬養毅であった。

犬養は当時立憲国民党の衆議院議員として内閣総辞職を求めて同年二月二三日の衆議院本会議において問責決議案の提案演説をおこなった。犬養は藩閥政府打倒の手段として正閏論争を政争の具として利用した側面があると筆者は考えている。

ところが、その犬養がその後、大正天皇即位と昭和天皇即位の大礼を契機とする歴史上の人物たちへの贈位問題で荻生徂徠とその一門たちが極一部を除いて除外されていることを指摘し、贈位が行われるべきであると主張したのに対して、正閏論争の時に喜田貞吉と並んで批判にさられた三上参次がそれに反対するという政治的地位の逆転現象が起きている。最後にこの問題を検討して、まとめにかえたい。

この問題に関しては丸山真男「荻生徂徠の贈位問題」<sup>(22)</sup>が委細を尽くして論じているので本稿ではその要点だけを紹介し、そこにおける問題点を指摘して結びにかえたい。

明治以降、南朝の「忠臣」たちへの贈位がおこなわれ、別格官幣社が次々と創建されたが、ここでは論文で指摘されている儒者、国学者などへの贈位に焦点をしぼって示すと、次の表のようになる。

明治一四年	蒲生君平	正四位		
一五年	林子平	正五位		
一六年	荷田春満	正四位	↓大正三年	従三位
	賀茂真淵	正四位	↓明治三八年	従三位
	本居宣長	正四位	↓明治三八年	従三位
	平田篤胤	正四位	↓昭和一八年	従三位
二四年	頼山陽	正四位	↓昭和六年	従三位
				国学四大人
				国学四大人
				国学四大人

二六〇年	二宮尊徳	従四位	
	藤田幽谷	正四位	水戸学派
	藤田東湖	正四位	水戸学派
	安積懋伯	正四位	水戸学派
	青山延宇	従四位	水戸学派
四〇年	山崎闇斎	正四位	闇斎学派
	中江藤樹	正四位	
	山鹿素行	正四位	
	新井白石	正四位	
	伊藤仁斎	正四位	
四二年	立原翠軒	従四位	水戸学派
	室鳩巢	従四位	幕臣儒者
四三年	熊沢蕃山	正四位	
	浅見綱斎	従四位	
四四年	貝原益軒	正四位	闇斎学派
	塙保己一	正四位	
	亀井南溟	従四位	
	中井竹山	正四位	
四五年	三浦梅園	従四位	



昭和三 三年														
大正四 年														
橘守部	滝鶴台	大原幽学	古賀謹堂	若林強斎	古賀穀堂	小関三英	松浦静山	横井小楠	山縣周南	伊藤東涯	安井息軒	皆川淇園	尾藤二洲	古賀精里
正五位	従五位	従五位	従五位	従五位	従四位	従四位	従三位	正三位	従四位	従四位	従四位	従四位	従四位	従四位
長州藩儒者														
閩斎学派														
国学者														
幕臣儒者														
幕臣儒者														
閩斎の師														
幕臣儒者														
幕臣儒者														

富士谷成章	正五位
松永貞辰	正五位
美馬順三	正五位
東条琴台	従五位
柴田鶴翁	従五位

〔丸山真男「荻生徂徠の贈位問題」(家永三郎教授東京教育大学退官記念論文集『近代日本の国家と思想』より作成)〕

なるほど、丸山の指摘する通り、「ノンポリ」な基準で近世を代表する儒者、国学者などに総花的に贈位されていることがわかるが、概して国学者の方が位が高く、儒者が低いことが分かる。さらに水戸学派は相対的に高いが立原翠軒が幽谷や東湖よりも一段低いことや、闇斎が国学四大人と同格で闇斎学派の綱斎、強斎も贈位されており、林羅山以下幕臣儒者が相対的に低いなどの傾向に政府の一定の政治的配慮がみてとれる。こうみてくると、これまた丸山の指摘するように、徂徠とその一門である護園学派(太宰春台や服部南郭、大内熊耳など)が山縣周南(長州藩主侍講)を例外としてことごとく贈位から外されていることに奇異の念を抱かざるを得ない。この点について丸山は「明治維新以来、江戸時代の主要な学者、―狭い意味の儒者だけでなく、国学者、心学者、あるいは洋学者も含めて江戸時代の主要な学者が、大日本帝国の時代に、ほとんど洩れなくいわゆる「特旨贈位」を受けたにもかかわらず、徂徠は、最後までリストからはずされた。しかもそれはたまたま係官の不注意によって、偶然にこぼれおちたというような性格のものではなくて、明らかに意図的な除外であった。」と指摘している。<sup>(74)</sup>

詳細は丸山論文を参照されたいが、犬養が想像以上の情熱をかたむけて徂徠の贈位に努力した結果も空しく、大正天皇、続いて昭和天皇即位の時の贈位から漏れているわけであるから、そこに政府の何らかの意図があったと考えるべきであろう。特に昭和天皇即位の時の贈位問題は犬養の奮闘もあり、「政府のトップ・レベルまで話が届きながら、なおかつ除外された、という問題の重さを看過すわけにはいかない」という丸山の指摘は説得力がある。この点について丸山は「他の故人の学者への贈位とのバランスで見ると、ここにはやはり近代日本の歴代「当局」が、徂徠とその直門に対して下した価値判断がネガ像で浮かび上がって来る。」と指摘している。

徂徠と護園学派が贈位から外された理由は実のところはつきりしてはいない。徂徠の中国「崇拜」が国体論上から問題視されたところにあつたようだが、丸山が指摘している理由の「いかにも」と思われるところが実は正閏問題とリンクしてくるのである。<sup>(77)</sup>

徂徠や護園一門には贈位などすべきでないという意見が支配的だったからではなしに、ただ、もしも贈位を行った場合に、「怪しからぬ」という火の手が上つて、国体論の立場から当事者が責任を追及されては厄介なことになる、という配慮が結局優先して、まあ見合せた方が無事だという決定にその都度なつたのではなかろうか。

つまり正閏論争が起こった時と同じようなシチュエーションを避けようとする指向性が働いていたと考えられる。しかも、正閏論争の時に実証的立場から南北朝並立論の立場で喜田貞吉とともに批判にさらされた三上参次が徂徠への贈位反対者として、そして贈位を執拗に要求する犬養への批判者として登場してきたことに

「徂徠贈位問題」のもう一つの歴史的意味がある。

犬養に対する三上の批判の中心は「徂徠の『政談』中には、朝廷を抑へ幕府を持上げ居れるのみならず、その文書中には將軍を指して皇上と称せるが如き事、是等が選に洩れたる一因ならずやと思はる。」というところにあるが、それを丸山は「語るに落ちた感がある」と評している。さらに三上はそういう徂徠への贈位を執拗に求める犬養を「不屈き至極」と批判した。この点について丸山は次のように評している<sup>(80)</sup>。

『国体論』という錦の御旗をかざして、徂徠どころか、犬養木堂をも『不敬』の言動をもって弾劾する帝國大学教授三上参次と、他方このタブーに満ちた問題をいささかも回避せず、挑戦に対して堂々と立向かう、政党政治家犬養木堂と、——この二人の論争を見る者は、果たしていずれが学問的精神の持主であるかに首をかしげるにちがいない。

この徂徠贈位問題に関しては丸山の指摘の通りであるが、筆者には三上はそうしななければならなかった必然性があったと思われる。三上は一九四一（昭和一六）年に『尊王論發達史』という本を上梓している<sup>(81)</sup>。三上本人はその二年前に死去しているが、それは「出しおくれ」の、まさに三上の「アリバイ証明」であったように思われてならない。つまり、この本の内容は三上が東京帝大文科大學（現在の東大文学部）の明治四〇年四月から大正七年にかけての講義録が基になっている。つまり、その講義の開始は正閏論争が起る以前であり、思いもかけず正閏論争で国体論者たちから激しい批判を浴びた三上は本来、尊皇の人であったことを「証明」する必要が遺族やその周辺にあったのではないか（あるいは本人にも生前そうした意志があったのではないだろうか）。そのことを「証明」するための絶好の機会が大正四年の徂徠への贈位問題で、故にこそ、

三上は国体論に与した立場から贈位に反対する意見を新聞紙上に発表したと考える。三上をこうした行為に走らせた理由こそ「単に官僚の事なかれ主義一般に解消できない、国体論のタブーである。」と丸山は指摘している。そして、その「国体論」の形成に大きく寄与したのが本稿で検討してきた南北朝正閏論争であった。

最後に、犬養の両問題での立場をどう解釈すべきであろうか。筆者は丸山のいうように「このタブーに満ちた問題をいささかも回避せず、挑戦に対して堂々と立向かう、政党政治家犬養木堂」という評価にいささか違和感を覚えるのである。この点を最後に考察しよう。

犬養は二月二三日の本会議において桂内閣に対する問責決議案の提案演説をおこなった。この日の議会は周知のように政府の請求によって秘密会となったため、国民にはその詳細は知らされなかったが、「新聞の伝えるところ」というものが史学協会編『南北朝正閏論』の冒頭に載っている。やや長いが問題点が全て出ているので以下に全文を掲げておく。<sup>(83)</sup>

①教科書問題に就ては、余は学者の仲間入して事実の探求をなすものに非ず。②然れ共、彼の維新の鴻業は何によりて樹立せられしか、皆南朝正統論によりて満天下の志士の熱血を湧かせしが為に非ずや。加之明治の初年、元老院にて有栖川宮殿下の選給ひし皇位継承論にも、「北朝不正位」とあり。又岩倉公が勅命を奉じて選びし大政紀要にも、「南朝を正位とす」とあり。之には今の山縣公も監事として之に与り、③現に又藤島神社、湊川神社も何が故に之に贈位し祭祀せられしや。又維新以後南朝の忠臣に一々贈位せられしは何の故ぞ。皆南朝を正統と認め、之に忠誠を盡せし勤王家の心事を愍れましに非ずして何ぞや。

③大和民族の誇りとする所は、三千年來万世一系の天子を戴き、金甌無缺の国体を維持するに在り、而して天に二日なきの明白なるに拘らず、南北朝の並立を認めれば、従つて日本が二つとなりしことを認めざる

べからず。此の如きは我国体上恕すべからざること、余の殊更に論ずるまでもなし。余は学者の随意なる研究に容喙するを好むものに非ず。然れども、堂々と教科書に此不都合を明記して、南北朝の正閏を怪しくするに至りては、断じて許す能はざる所なり。

更に他の事実を云へば、文部の編纂官は、三種の神器と皇位との關係につき、若し天皇の踐祚に神器必要とせば、権力あるもの来りて之を奪取するあらば、如何と暴論するに至れり。斯の如きことを敢て言議し、④実力さへあらば正位なりと云ふが如き意味を仄めかすは幸徳以上の大逆なり。此事は文部大臣一人の引責にて止るべきに非ず。内閣全体の責任なり。此際内閣が自ら引責辞任することは我国体を保存し光輝ある歴史を永遠に維持する所以にして、余は諸閣臣の喜んで此挙に出づべきを信じ、敢て之を勧告し、彼の決議案を提出したるものなり。

重要と思われる所には番号を付し傍線を引いた。それに従つて見ていこう。まず、①において「教科書問題に就ては、余は学者の仲間入して事実の探究をなすものに非ず。」としつつ②③のように主張している。

然れ共、彼の維新の鴻業は何によりて樹立せられしか、皆南朝正統論によりて満天下の志士の熱血を湧かせしが為に非ずや。…（中略）…

大和民族の誇りとする所は、三千年来万世一系の天子を戴き、金甌無缺の国体を維持するに在り、而して天に二日なきの明白なるに拘らず、南北両朝の併立を認めれば、従つて日本が二つとなりしことを認めざるべからず。此の如きは我国体上恕すべからざること、余の殊更に論ずるまでもなし。

さらに犬養は、文部の編纂官＝喜田貞吉が「或は神器の所在を以て南朝を正統とする説も有力であるけれども神器のみを以て帝位の御璽とする時は萬一にも神器を有す可からざる者が非常なる手段を以て占有した場合も其者は天子と云ふ事が出来るかと云ふ有力な反対の論点<sup>84</sup>が昔からあるのである」と述べたことをとらえて、④「実力さへあらば正位なりと云ふが如き意味を仄めかすは幸徳以上の大逆なり。」と「国体論」を振りかざしている。喜田は論理的可能性をいつているにすぎないわけであるが、文部省編纂官である喜田の一言を文部大臣のみならず「内閣全体の責任」であるとして「引責辞任することは我国体を保存し光輝ある歴史を永遠に維持する所以」であると主張している。これらの論点はここで見てきた南朝正統論の論点をすべて揃えている。

以上見てきたように、犬養は南北朝正閏問題で積極的に南朝正統論に与して「国体論」の形成に積極的役割を果たした。それは犬養にとって第一義的には藩閥・軍閥の巨頭桂内閣の打倒の手段としてであったに違いない。そしてその主張を犬養にとらせたのは「一君万民」論的民権思想ではなかったか、と思われるところが重要である。故に、犬養の考えでは徂徠への贈位は、国家最大の「ハレ」の行事である天皇即位時においてなされるべきであった。重要なことは「一君万民」論的民権思想は、一方では自由民権運動や「大正デモクラシー」のバックグラウンドであったが、他方、同時に「国体論」とも通底していたと考えられることである。つまり犬養にとっては、南北朝正閏問題で南朝正統論に与したことで徂徠への贈位は等価だったわけである、というのが筆者の解釈である。

ところが現実的には犬養の思い描いていたように事は進展しなかった。徂徠への贈位問題では、自身が開くのに一役かった「国体論」の回路によって「不敬」のレッテルを張られたのである。しかもそれが三上によってなされたことは歴史の皮肉であったといえ、言い過ぎであろうか。

註

- (1) 幸徳の秘密裁判でのかうした発言については、何時、誰が、どんな目的で、誰に漏らしたかは明らかにっていない。法制史家の瀧川政次郎が後に記した所によれば、一九二五（大正一五）年の夏に当時法政大学の講師をしていた瀧川が法学部長であつた小山松吉から聞かされたこととしており、瀧川は大逆事件時の検事総長で当時法政の学長であつた松室致から小山に伝えられたと推測している（瀧川政次郎「誰も知らない幸徳事件の裏面」、『特集人物往来』一九五六年一〇月号）が、それは裁判からずいぶん時間がたつてからのことであり、だれが最初に漏らし、それがどのような経緯で読売新聞の記事になつたかは依然として不明のままである。さらに、花田清輝は谷崎潤一郎の『吉野葛』に関して、「池島信平編の『歴史もやま話』によれば、どうやらその火つけ役を演じたのは、幸徳秋水だつたようだ。』と記し例の発言を引いた後、「そして、いわゆる大逆事件は秘密裁判だつたにもかかわらずいいや、むしろ、秘密裁判だつたがゆえに、いつかその幸徳の言葉は外部へもれ、まず、教育者たちを刺激した。」と正閥論争との関係について述べている（花田清輝「吉野葛」注、『室町小説集』、講談社版、九頁）。また、帝国議会での犬養の演説については、本稿「まともにかえて」を参照されたい。なお、引用文中の傍線はすべて引用者。
- (2) 「南北朝論」、『村田正志著作集』第三卷所収、一三二頁
- (3) 後小松天皇が編纂させた『本朝皇胤紹運録』がその代表的なものである。後小松は崇光上皇の皇統（伏見宮家、光厳系の嫡流）との間に皇位をめぐる争いがあつたので、特に自己の属する後光厳系の正統意識を強く持っていた。『本朝皇胤紹運録』は勅撰の天皇・皇族の系図として尊重され、幕末までこれを書き継いで皇室系譜がつくられてきた。当然、北朝正統の立場で編纂された。
- (4) 維新後、和氣清麻呂など皇室を護つたとされる者たちや南朝の「忠臣」たちや後醍醐の皇子たちが祭神とされた別格官幣社や神宮が次々と創建されていった点については拙稿「招魂祭祀考Ⅰ―招魂祭祀の歴史的形成と展開」（『流経法学』第一五号所収、四七―五六頁）を参照されたい。
- (5) 「継体天皇以下三天皇皇位継承に関する疑問」（『喜田貞吉著作集3』所収、一九八一年、平凡社）
- (6) 林屋辰三郎著「継体・欽明朝内乱の史的分析」（『古代国家の解体』所収、一九五五年、東京大学出版会）



- (7) 「後宇多上皇讓状案」(竹内理三編『鎌倉遺文 古文書編』第三〇巻、第2368号、三二一頁)、なお原文は漢文。
- (8) 平泉澄『建武中興の本義』(至文堂、一九三九年)九頁、なお、ここで皇国史観という概念について言及しておきたい。この点については、長谷川亮一『皇国史観』という問題(白澤社、二〇〇八年)に詳しいが、長谷川は『皇国史観』という言葉には、今日、様々なイメージがつきまといっている。：(中略)：史学史の文脈では、この言葉は普通、日本中世史の研究者であった平泉澄とその周辺の歴史観を指すのに用いられる。また歴史教育史の分野では、一般には国定国史教科書の歴史観を指すことが多い。しかもそれだけでなく、一般にこの言葉が用いられる場合は、国学者や神道家などの歴史観を指したり、『神皇正統記』や『大日本史』などの歴史観を指したり、あるいはただ漠然と天皇中心的、あるいは日本中心的な歴史観を指したりすることもある。要するに、何をもって『皇国史観』と呼ぶかは、じつはかなり曖昧なのである。(一―二頁)と指摘している。そして、皇国史観の形成と展開に平泉の果たした役割を決定的なものとは必ずしもみなししていない(第一章参照)。本稿は皇国史観とは何であるかを直接に分析・検討するわけではないが、平泉をその代表的論者として採り上げ、さらに正閏問題がその形成において重要な契機になっていることを分析の対象にしている。その理由は本文第三章第一節で平泉の主張に触れているところで分析しているが、皇国史観そのものについてと平泉の位置と役割について詳しくは別の機会を得たいと考えている。
- (9) 同前、一五頁
- (10) 同前一六―一七頁
- (11) 同前、一七頁
- (12) 南朝正統論では後醍醐は隠岐に流されていた間も在位したものとみなす。そうでなければ後醍醐は重祚したことになる。したがって、隠岐流罪中は「巡狩」あるいは「巡幸」といって天子が国都王城を離れ留守にしていた(実際は流浪している状態)と見做す中国春秋時代に倣ったものである。これは中国の歴史でしばしば用いられたロジックである。これに基づき後醍醐は光厳を廃した後、「皇太子のままであった」光厳を太上天皇としたのである。
- (13) 『南北朝正閏論纂』(皇典講究所・國學院大學、一九一一年)、三―五頁
- 同前七頁、しかし、いわゆる三大特筆はかならずしも光圀の独創にかかるものではない。『大日本史』以前に林羅山は既に

女帝を否認し（『羅山文集』）、大友の即位を認めこれを正統としている（『丙辰紀行』）。ただし、南北朝正閏論については、南朝正統の立場で徹底していたわけではない。この点では、林家史学と前期水戸学の間には違いが存在する。

この点について詳しくは安川実『本朝通鑑の研究 林家史学の展開とその影響』（言叢社、一九八〇年）三五―三八頁を参照されたい。光圀は林家史学の中で自己の歴史観を形成していった人であった。そして『大日本史』編纂の過程で林家史学から自立していったと考えられる。光圀にとって羅山は師、鷺峰は先輩、読耕斎は年齢の近い親しき友であった。羅山、鷺峰、読耕斎などの林家史学が三大特筆の先駆けをしながら、なぜ『本朝通鑑』などの歴史叙述において、『大日本史』のようにイデオロギー的に徹底した立場を採れなかったのかについては、安川は「文公綱目」的歴史観と「溫公通鑑」的歴史観の二極の間で林家史学が形成されていったという見通しを提示している。また、一歴史家羅山、鷺峰、読耕斎という立場と、幕府を代表して修史する立場の違いということも考慮されなければならないが、「なぜそうなのか」という事も含めて本稿ではこれ以上深く立ち入ることはできない。この点については他日を期したい。

(15) 同前八頁

(16) 同前一六頁

(17) 同前一四頁

(18) 同前一六頁

(19) 同前、なお教師用のテキストでは一〇一頁に当たる。

(20) 同前一六―一七頁

(21) 同前一七―一八頁

(22) 同前一八頁

(23) 同前

(24) 『梅松論』（新撰日本古典文庫、現代思潮社、一九七五年）、四五頁

(25) 『村田正志著作集』、第一卷、三九頁

(26) 『六代勝事記・五代帝王物語』（中世の文学第一期第二六卷、三弥井書店、二〇〇〇年）、一五五―一五六頁

- (27) 引用はともに前掲『南北朝正閏論纂』、一八～一九頁
- (28) 同前一九頁
- (29) 同前二〇頁
- (30) 同前三二七～三二九頁、ただし引用のページ数は『南北朝正閏論纂』に記載のもの
- (31) 『村田正志著作集』第三卷、一四〇頁
- (32) 前掲『南北朝正閏論纂』三三一頁
- (33) 同前三二三～三二四頁
- (34) 同前三三頁
- (35) 同前
- (36) 同前三二～二六頁
- (37) 同前二七頁
- (38) 同前三三〇～三三一頁、敦成は後一条天皇のことであり、木田の誤記か、本書の誤記と思われるので(ママ)を付した。
- (39) 前掲『村田正志著作集』第一卷、五〇頁
- (40) 『日本史の謎と発見 第七卷 南朝と北朝』所収、毎日新聞社、一九七九年、以下神器に関する記述はこれを参照した。
- (41) 林家辰三郎『南北朝』、八〇頁(創元社、一九六七年)
- (42) 同前八一頁
- (43) 『東京朝日新聞』二月一九日、前掲『南北朝正閏論纂』所収、五七八頁
- (44) 『水戸学』所収(『日本思想体系』第五三卷、岩波書店)なお( )の中は引用者。
- (45) 『南北朝論』、『村田正志著作集』第三卷所収、一三二頁
- (46) 拙稿『日本国王』号に関する一考察『国家論の視点から』(『流経法学』第 卷第 号)参照
- (47) 「水戸学の意義」、『水戸学論叢』所収
- (48) 同前

- (49) 「水戸学の特質」、前掲『水戸学』解説、五五六頁
- (50) 雄山閣、一九三六年
- (51) 至文堂、一九三四年
- (52) 至文堂、一九三九年
- (53) 前掲高須『水戸学派の尊皇及び経綸』、一二三―一二四頁
- (54) 同前一二四頁
- (55) 前掲『後醍醐天皇奉賛論文集』、一三八頁
- (56) 同前二三八―二三九頁
- (57) 前掲『建武中興の本義』、八頁
- (58) 同前一―二頁、旆は旆と思われる。意味は旗である。
- (59) 高須前掲書、一二五頁
- (60) 同前一〇〇頁
- (61) 前掲『後醍醐天皇奉賛論文集』、二頁
- (62) 同前
- (63) 同前
- (64) 同前一九頁
- (65) 高須前掲書、一〇二頁
- (66) 同前一〇二―一〇三頁
- (67) 同前一二三―一四頁
- (68) 同前二八五頁
- (69) 『梅松論』（新撰日本古典文庫、現代思潮社、一九七五年）、一二四―一二五頁
- (70) 『現代史資料』第四卷「国家主義運動（1）」、三九八頁、みすず書房、一九六三年

- (71) 同前、四二〇～四二二頁
- (72) 家永三郎教授東京教育大学退官記念論文集『近代日本の国家と思想』、三省堂、一九七九年
- (73) この点については、拙稿『「招魂祭祀考」 I ～招魂祭祀の歴史的形成と展開』（『流経法学』第八卷第二号）四五～五六頁を参照されたい。
- (74) 前掲『近代日本の国家と思想』、一〇九頁
- (75) 同前一二三頁
- (76) 同前一一〇頁
- (77) 同前一二三頁
- (78) 『毎日新聞』大正四年一月一日付け、同前一二七頁
- (79) 前掲『近代日本の国家と思想』、一三三頁
- (80) 同前一二七頁
- (81) 本書は弟子の辻善之助が「跋」を記していることから、辻が中心となって編纂されたものと思われる。（富山房、一九四一年）
- (82) 前掲『近代日本の国家と思想』、一三四頁
- (83) 史協学会編『南北朝正閏論』三～四頁
- (84) 前掲『南北朝正閏論纂』三四〇頁